

Changing the City through

LANDSCAPE DESIGNREVIEW

まちを変える景観デザインレビュー



Nasushiobara City Library MIRURU



Minakata Kumagusu Museum



Nagato Yumoto Onsen ONTO



Oimachi Ekimae Public Toilet



Kesennuma Naiwan MUKAERU & UMARERU



Yokohama City Hall

INDEX

LANDSCAPE DESIGN REVIEW

景観デザインレビューとは	02
景観デザインレビューに関わる 主役たちと当日の進め方	04
景観デザインレビューの魅力と効果	06
デザイン調整における各事例のポイント	07
景観デザインレビューに関するキーワード	08
デザイン調整時の各事例タイムライン	46

INTERVIEW

景観まちづくりの現場から	09
1 那須塩原市図書館みるる	10
2 南方熊楠記念館新館	16
3 長門湯本温泉 恩湯	22
4 大井町駅前公衆便所	28
5 気仙沼内湾 ムカエル・ウマレル	34
6 横浜市役所	40

COLUMN

レビュアーの立場から	47
1 浜甲子園団地	48
2 鶴岡第2地方合同庁舎	52



LANDSCAPE DESIGN REVIEW

景観デザインレビューとは

地域の景観形成の方針や基準をもとに発注者、設計者、専門家が行う建築物のデザイン等についての協議や調整はこれまでも取り組まれてきました。

ここでは、こうした取り組みにおいて、さらに参加者が対等な立場で、創造的に議論する場として、実効性を高めるために様々な工夫された形式のものを「景観デザインレビュー」と定義しています。

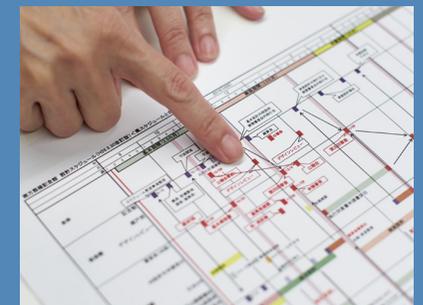
本書では、デザイン調整などの協議を経てつくられた建築物を当時の設計担当者にインタビューを行って理想の建築物をつくるために必要なデザイン調整のヒント、すなわち景観デザインレビューのカタチを紹介します。

紹介する事例は公共施設だけでなく民間施設も掲載しています。協議するシステムがない状況下でも、設計者の発意で独自にデザイン調整を実施した事例も取り上げました。今回の取材を通して、

コンペ・プロポーザルの審査員が景観デザインレビューのレビュアーとしても関わる事例も多いことがわかりました。

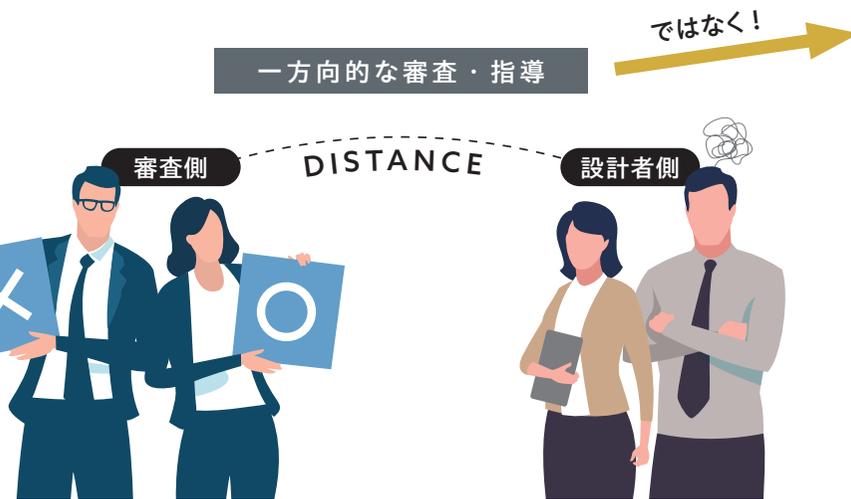
冊子後半は景観デザインレビューでの第三者的な立場の専門家として、設計案を理解して適切なアドバイスを行う「レビュアー」を担当したことがある、まちづくりの現場を経験している建築家の体験談を掲載します。

本誌は建築設計者だけでなく、建築を発注する自治体や民間事業者、さらにランドスケープ、土木等の様々な分野の専門家にも手に取っていただきたいと考えています。「対話」によって地域にふさわしいデザインに近づける重要性や楽しさを感じ取っていただき、全国へ向けた景観デザインレビューの普及を通じて、建築が、地域が、そしてまちがより良いものとなっていく活動につながることを期待します。



景観デザインレビューに関わる 主役たちと当日の進め方

特定の誰かによる一方的な審査・指導の場ではなく、互いの意見を尊重して対等な立場で議論することが大きな特徴となる景観デザインレビューにおいて、議論当日は対象となる建物に直接関わる設計者や事業者はもちろん、レビュアーとなる専門家や自治体の職員、地域の住民の方など、多くの関係者が集まって行われます。それぞれ立場は異なりますが、全員が大事な役割を持っています。ここでは主要となる登場人物を簡単にご紹介し、景観デザインレビュー当日の基本的な進め方もお伝えします。



景観デザインレビューの基本的な進め方

枠組みの整理

景観デザインレビューに関する制度やルールが用意されていない場合には、そのプロジェクトの特性に沿って実施体制やスケジュールといった枠組みの整理を行うことから始まります。自治体の条例やガイドライン等によって、対象となる建物の条件やデザインレビューを行うタイミングが予め決められている場合もあります。

事前の準備

景観デザインレビューを実施することが決定した後は、事前準備として、プロジェクトの対象敷地及びその周辺の現況が分かる資料、模型や図面といった“設計の意図を説明するための材料”の用意を進めます。関係者との事前相談を踏まえた議論の論点整理などが円滑に景観デザインレビューが進むポイントです。

景観デザインレビュー当日

まずは主催者からの趣旨説明などを行ったあと、設計者や事業者による設計案のプレゼンテーションを行い、それを踏まえて、専門家(レビュアー)を交えた意見交換に移る流れが基本的な進め方の1つです。議論は90～120分程度の時間の中で論点を絞って進行することが有効です。

実施後のフォロー

出された意見の取りまとめなどを踏まえて、設計案のブラッシュアップを行います。プロジェクトによっては何度かレビューを繰り返し、関係者間で協議の成果を共有します。場合によっては修正前の設計案と最終の設計案を合わせて、景観デザインレビューの成果として公開することもあります。



景観デザインレビューの魅力と効果



景観法が2004年に制定され、地域に大きな影響を与える建築物が計画される際には、周辺景観に配慮する協議・調整が全国各地で行われています。景観デザインレビューは、建築に関連する分野の専門家と対話型で、まちにふさわしいデザインとするための取り組みであり、関係者の想いを引き出しながらより良い空間の実現に寄与しています。

POINT 1 デザインの質を高める 細やかな調整ができる

事業内容に応じて関係する専門分野は変わってきますが、複数の専門家等が関わることで、日常的に訪れくつろぎたくなる滞留空間、市民の活動や交流を生む空間、魅力的な夜間景観、使いやすい施設運営等を踏まえながらデザイン調整を進めることができます。

POINT 3 公益性の高い空間の 創出につながる

まちにとって重要なプロジェクトは、外観だけではなく、公益性の確保や賑わい創出への寄与、地域からの親しみ等、求められる要素が数多くあります。限られた関係だけで物事が進むことを防ぎ、公に開かれた空間の創出や、対象敷地内に留まらず周囲を含めたまちの一部として良好な景観の形成に貢献しています。

POINT 2 その場所にふさわしい あり方となる空間を実現する

設計者や事業者は、デザインの質だけではなく、コストや工期、機能等と闘いながら事業を進めています。設計過程の中で関係者の対話を繰り返すことで、その場所に対する大事な想いを共有し、互いの立場を尊重しながらデザインに反映を促す機会となります。

POINT 4 専門家の関与によって 人材の裾野が広がる

建築デザインの分野では市民活動の場や良好な景観の創出に挑戦できる人材が常に求められています。新たな人材が大きなプロジェクトに参加する際に、専門家等が第三者として関わり、客観性や技術面を補うことで人材の成長を促し、施主・利用者・周辺住民等に安心感と快適性のある空間の実現性を高めます。

デザイン調整における各事例のポイント

インタビューを実施した6つの事例における景観デザインレビューのポイントをピックアップ。事例を通して、さまざまな景観デザインレビューの姿がみえてきました。



那須塩原市図書館みるる

1. プロポーザルコンペの審査員が継続してデザインレビューを実施。
2. 与条件の変更により、当初提案の2階建てが3階建てになるところ景観デザインレビューにより当初提案に戻り、設計思想を実現。
3. レビューアは多角的な視点で設計者を後押し。

南方熊楠記念館新館

1. プロポーザルコンペの審査員が継続してデザインレビューを実施。
2. デザインレビューにより、基本設計終盤で新館と本館をつなぐブリッジの接続位置を大胆に変更。
3. 建物外観の視認性確保と本館の入口前に明るい広場のような場所を確保。



長門湯本温泉 恩湯

1. 景観条例に適合し得るデザインとなるかという観点も含めデザインレビューを実施。
2. デザインレビューを通じたアドバイスを受けて、設計内容が徐々にブラッシュアップ。
3. 俯瞰的な視点で公共的な価値や意味の大切さを理解されているレビューアの参画。

大井町駅前公衆便所

1. デザインコンペで選定された設計者を建築家協会がレビューアとしてフォロー。
2. 意匠設計、設備、構造等のレビューアが設計内容をチェックすることで、安心感のある設計検討を支援。
3. 線路横の施工制約の中、レビューアは元のデザインの良さを残して解決していくという視点でサポート。



気仙沼内湾ムカエル・ウマレル

1. 景観デザインレビューの枠組みがない中、隣接する設計者が自発的にデザイン調整を実施。
2. 模型を活用し、2つの建物の雰囲気近くになるよう、違う素材を使用しつつも色味等を調整。
3. ランドスケープや照明の担当者の参画により、デザインの統一性を実現。

横浜市役所

1. 横浜市のデザインレビューは計画案を発表するイベントとして開催。
2. デザインレビュー以外にも市民の声の整理や各種会議での調整役となる専門家の関与により、デザインの専門家と低層部のデザイン、まちなみや緑化、回遊性等について議論し、魅力的な空間を実現。



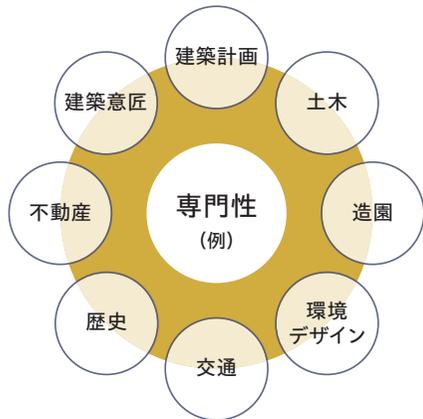
景観デザインレビューに関するキーワード

本書では、建築設計のデザイン調整に関する専門用語が度々登場します。

デザイン調整に初めて触れる方への、本編の内容の理解を深めるための、5つのキーワードを解説します。

デザインレビューのレビューア

デザインレビューの場で、第三者的な立場として設計案を理解し、助言を行う専門家等のことです。必要な専門分野は事業内容や立地条件等によって異なり、建築分野以外にも造園や地域の歴史に精通する方が加わることもあります。事業ごとに適切な分野を検討してレビューアを選定することが、成功の鍵となります。



設計者選定のデザイン・コンペとプロポーザル

設計者は、デザイン・コンペやプロポーザルで選定されることが多くあります。デザイン・コンペは、主に設計案を決めるものであり、選定された設計案の通りに整備されるのが基本です。一方プロポーザルは、設計を行う人を決めるためのものであり、選定後に調整を行いながら最終的な設計案を決める流れとなります。



一般公開で実施している場合のデザイン・コンペやプロポーザルのプレゼンテーションの様子。

デザイン調整とデザインレビュー

デザイン調整とは、良好な建築空間の実現のために、関係者同士が設計案を調整する行為のことです。本誌に掲載した各事例はいずれも設計者・専門家等がデザイン調整を実施し、建築設計を行っています。デザインレビューは、デザイン調整の手法の一つであり、設計者と第三者的な専門家が対話で、全体や細部の調整事項を共有する場です。



デザインレビューの実施イメージ。設計者、専門家が模型を取り囲み議論を展開。

設計の工程とデザイン調整のタイミング

建築設計は、配置・間取り・仕上げの方向性等を決める「基本設計」と、細部の仕上げや部材等を決める「実施設計」に分かれます。デザイン調整の適切な時期や回数はケースバイケースですが、基本設計からコンセプトや景観等にふさわしいか議論し、実施設計でも細部の調整のため、複数回にわたって行うことが重要です。

デザイン調整のタイミングの一例



まちづくりや設計に関するワークショップ

まちづくりや設計の現場では、住民等が参加するワークショップを実施することもあります。その際、参加者同士でまちの将来像や建築設計に対する希望等について対話が行われますが、専門的な議論や案を決めるケースは少なく、住民や利用者等の目線からの意向を集めることを目的として開催されることが多いです。



ワークショップでは図面や付せん紙を使用し、建築計画に反映すべき参加者の想いやアイデアを抽出。

INTERVIEW

景観まちづくりの現場から

- 1 那須塩原市図書館みるる
- 2 南方熊楠記念館新館
- 3 長門湯本温泉 恩湯
- 4 大井町駅前公衆便所
- 5 気仙沼内湾 ムカエル・ウマレル
- 6 横浜市役所

PART



図書館内メインストリート「みるるアベニュー」。人の動線を取り込み、まちと一体となった図書館空間を実現する。

全面ガラス張りのエントランスと、まち並みに溶け込む外観が、訪れる人々を魅了する。

「森の下で本を読む環境」をキーワードに 幅広い世代の活動が生まれる居場所をつくる

黒磯駅前に隣接する市立図書館「みるる」は、静かに読書に没頭できる場所でありながらも、まちに開いた場所でもあります。生まれ育った地元の図書館を変えたいという熱い想いで設計に携わった、UAoの伊藤麻理さんに、その過程をお聞きました。

那須塩原市図書館 みるる / UAo 伊藤麻理氏インタビュー



市民の活動と交流が生まれる図書館の実現のため、開放的な空間を生み出すデザインレビュー

— みるるの設計に関わったきっかけは？

UAo 伊藤麻理さん(以下、伊藤さん)：黒磯(栃木県那須塩原市)は私が生まれた場所ということもあり、以前の図書館が使いにくかったことを感じていました。それを变えたいという強い想いがあって、設計者を決めるプロポーザルに応募しました。自分のまちなのでことんやってみようという想いで、設計だけでなく、開業後の運営の提案も含めて、企画に盛り込みました。熱い想いをもって挑んだので、プロポーザルを取ることができて本当に嬉しかったです。

— 設計者を選出するためのプレゼンテーションで、どのような提案をされましたか？

伊藤さん：「森の下で本を読む環境づくり」というキーワードでプロポーザルを提案しました。建築家は難しい言葉を使いがちですが、私たちはたくさんの人々にコンセプトを理解してもらうため、小学生でもわかるような表現を心掛けました。

図書館の真ん中に日常的に通り抜かれる「みるるアベニュー」を通し、駅前広場から人の流れを引き込むようなエントランス空間をつくることで、開放的な空間に市民の美術作品などをストリートアートのように楽しめる1階や、オレンジ系の照明で落ち着いた空間となる2階に引き込む動線づくりの提案を行いました。

まちの延長としての空間となるように放射状の本棚を配置することで、通りを歩いていてこの見え方が変化しますし、まちに対して開けた空間になるんです。

— 選出された後、まずはじめに行ったことについて教えてください。

伊藤さん：設計の最初に、図書館の所管部局から蔵書数を25万冊に増やしてほしいと言われました。プロポーザル時点では15万冊の条件だったので、施設内に収まるかという検討から始まりました。

他にも、市民と意見交換を行うワークショップを通じて、児童図書スペースがもっと必要だという声もあり、吹き抜け部分に「森のポケット」と名付けた児童のフリースペースをたくさんつくりましたし、まちなかに中高生の居場所が少ないという意見もあったので、放課後

や休日に課外活動に一人でも複数人でも利用できる学習空間も設けました。

長い間、まちの人たちに親しまれて利用されるために、これからの図書館のあり方を見据えて、市民が運営に関わったり、デジタルコンテンツを積極的に活用した情報発信や、時代が伴う読書の仕方(電子書籍化など)の変化に対応する提案もしました。

— 那須塩原市図書館のプロジェクトでデザインレビューがあると知った時期はいつですか？

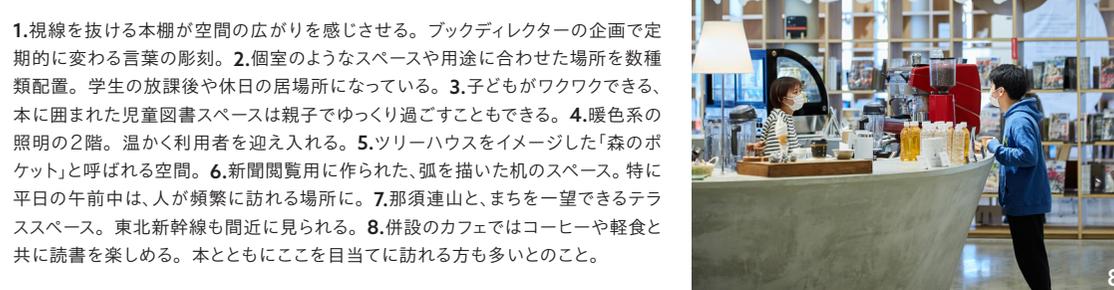
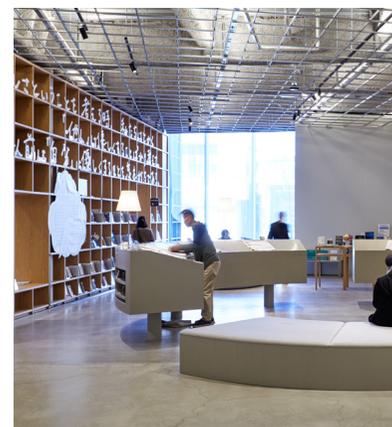
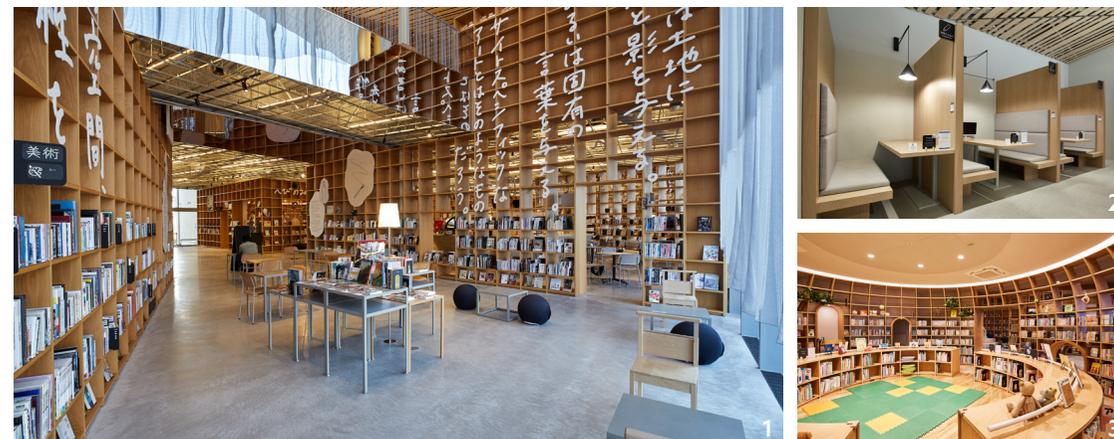
伊藤さん：デザインレビューが実施されることはプロポーザルの公募要項に記載されていましたが、初めての経験だったので、何をやるんだろうと正直思いました。でも、蔵書数が増加してプロポーザルの時の2階建てから、3階建てに設計案が変わりそうでしたし、デジタルコンテンツ等の新たな提案についても議論したかったので、正直な現状を話そうという気持ちで臨みました。

最初のデザインレビューが行われたのは基本設計の終盤で、市役所との協議で使用する資料や模型を使って、検討状況や私たちの想いをありのままに伝えました。

— デザインレビュー時のやり取りは？

伊藤さん：レビュアーの皆さんはプロポーザルの審査員だったので、元々の設計案を評価して下さった方々でした。3階建てになると、プロポーザル時に大切にしていた1階と2階の繋がりを生み出しにくくなるので、市民のための図書館を実現するために2階建ての案に戻すことを進言してくれたんです。そこで、建築設計が専門のレビュアーだった小嶋さんが、これからの時代に図書館に求められる空間のあり方を語り、同じく建築設計が専門のレビュアーの古谷さんが行政の方々の理解を促す発言をしてくれたことで、本来のコンセプトを取り戻すことができました。私たちが設計を進めながら、より良い施設にするために図書館の所管部局への提案や協議を行っている時期だったので、レビュアーの皆さんに応援されているという感覚を持ち、非常に心強かったです。

実施設計の段階でもデザインレビューが行われましたが、ほとんどは前回からの変更修正事項の確認程度でスムーズに進みました。レビュアーが「こうしなさい」



1.視線を抜ける本棚が空間の広がりを感じさせる。ブックディレクターの企画で定期的に変わる言葉の彫刻。2.個室のようなスペースや用途に合わせた場所を数種類配置。学生の放課後や休日の居場所になっている。3.子どもがワクワクできる、本に囲まれた児童図書スペースは親子でゆっくり過ごすこともできる。4.暖色系の照明の2階。温かく利用者を迎え入れる。5.ツリーハウスをイメージした「森のポケット」と呼ばれる空間。6.新聞閲覧用に作られた、弧を描いた机のスペース。特に平日の午前中は、人が頻りに訪れる場所に。7.那須連山と、まちを一望できるテラススペース。東北新幹線も間近に見られる。8.併設のカフェではコーヒーや軽食と共に読書を楽しむ。本とともにここを目当てに訪れる方も多いとのこと。

ということはずいぶん、疑問を投げかけて設計者に考えさせるといったアドバイスをしてくれたおかげで、私たちと検討を深めるきっかけにもなりました。もちろんプロポーザルの審査員として私たちを選んだ責任感も持たれていたと思いますが、ワークショップや1回目のデザインレビューの様子から、レビュアーの皆さんもこの状況乗り越えて良いものができるだろうと感じたようです。

— デザインレビューを行ったことで、設計で変化した部分はどこでしょうか？

伊藤さん：一番大きかったのは2階建ての設計に戻せたことです。蔵書数が25万冊になると空間の余裕がほとんどなくなり、市民活動のための空間が取れなくなってしまいます。結果的に蔵書数は20万冊となりましたが、将来的なデジタル化に必要な蔵書空間が減ることや、ラウンジのような図書館が必要だという考え方をレビュアーがおっしゃってくださり、市も歩み寄ってくれました。そうすることで、例えば1階では天井の格子状のパーにS字フックで簡単に美術品がぶら下げることができるため、ストリートアートを楽しめるような空間にできましたし、所々に世代にあわせた空間を設けることもできました。

マルチディスプレイを利用した利用者への館内利用のサポートや学習コンテンツの発信等を行うことで、サービスの向上や空間の有効活用ができることもデザインレビューで提案してみましたが、まだ時代がついてこないだろうと言われ、こちらは実現しませんでした。しかし、本棚を一般的なものより大きくして視線が抜けるようにしており、将来的にはこの大きさをデバイスの設置場所や市民のギャラリースペース等として有効活用できると考えています。

— デザインレビューの意義とはどんなことでしたでしょうか？

伊藤さん：私自身、みるるの設計やデザインレビューを



プロポーザルやレビュー時に1～2階の繋がりを模型でも説明。



グッドデザイン賞や日本建築士事務所協会優秀賞を受賞(2021年)。

通して、プロジェクトの動かし方を学びました。特殊なプロジェクトで様々なトラブルも起きましたが、レビュアーの方々のアドバイスを活かしながら動かしていくと良い方向に進むと改めて感じました。

建築家には色々なタイプがありますが、私たちは図書館のありたい姿の実現のために様々な提案や挑戦を行いながら設計を行う中でプロポーザルの設計案と異なる方向に進みそうなところをデザインレビューで戻してもらえたので、将来のまちにとってどうなるか良いのかを多角的な視点で発言できる方がレビュアーとして引張ってくださることは非常に重要だと感じています。特に経験が浅い設計者や若い世代が大きな案件の設計にチャレンジする時に、経験の蓄積があるレビュアーとの対話は非常に貴重な機会になると考えます。

— 最後に那須塩原市図書館みるるについて、今後期待することは？

伊藤さん：1階も2階も、まちとつながりのある図書館となり、隣接する駅前広場のバス乗り場の屋根も、みるるの屋根とあわせたデザインとなりました。図書館の周辺では賑わっている新しい店もあります。駅前広場はキッチンカーでの販売や屋外イベントもできる空間となっているので、図書館整備をきっかけに、まちの賑わいが広がっていくことを期待しています。

伊藤麻理 | Mari Ito

1974年栃木県生まれ / 1997年東洋大学工学科建築学科 / 1999年同大学大学院工学科建築学専攻修士課程修了 / 1999～2000年スタジオ建築計画 / 2001年 Atelier Kempe Thill architects and planners / 2006年アトリエイंक設立 / 2010年Urban Architecture Office. 合同会社に改名 / 2013年UAoに変更 / 2006年～東洋大学非常勤講師



定期的な子どもの読み聞かせなど、みるるの広い空間を活用して開催。その他、様々な市民活動の場にもなっている。



一般的な本棚サイズよりも大きくすることで企画展示スペース等にも使用可能。電源コードを這わせることもできる。



みるるの屋外にあるベンチスペース。近所の人々の井戸端会議や沿道店舗とともに賑わいを生み出す場所として創出。



待合スペースも兼ねた正面の階段は、近隣の宇都宮市大谷町で採掘される「大谷石」を粉砕して混ぜた左官仕上げ。



駅前広場にも光が降り注ぐ。昼夜を問わず、まちのランドマークに。

建物の概要

所在地：栃木県那須塩原市本町1-1
 主用途：図書館
 階数・構造：地上2階・鉄骨造
 敷地面積：4,011.49㎡
 建築面積：3,078.21㎡
 延床面積：4,967.69㎡
 工期：2017年12月～2020年1月

設計者・関係者の概要 ※肩書はいずれも当時

建築設計：UAo株式会社
 レビュアー：三橋伸夫(宇都宮大学教授)
 小嶋一浩(株式会社シーラカンズアンドアソシエイツトウキョウ代表取締役)
 古谷誠章(有限会社NASCA代表取締役)
 花井裕一郎(NPO法人オプセリズムCEO)



国立自然公園に指定されている和歌山県白浜町の景勝地、番所山公園の豊かな自然環境の中に建設された記念館。

厳しい自然地形内に建てられた南方熊楠記念館の本館と新館。周囲は崖地となっている。

半島の先端に建つ、 自然に寄り添う記念館

博物学者・南方熊楠氏の功績を伝える記念館(新館)を建設するプロジェクト。審査員の提案から景観デザインレビューの実施が決まりました。シーラカンスアンドアソシエイツウキョウ/CAtの、パートナーとして小嶋一浩さんと共に設計を行った赤松佳珠子さんにお話をお聞きしました。

南方熊楠記念館新館／設計者 CAt赤松佳珠子氏インタビュー



景観デザインレビューを経て設計変更した 本館と新館を繋ぐ橋。光が注ぐ明るい空間に。

— 南方熊楠記念館新館の設計に関わるきっかけは？
CAT赤松佳珠子さん(以下、赤松さん)：設計者は公募型プロポーザルで決められましたが、我々 CAT (シーラカンズアンドアソシエイツ トウキョウ)として当時実績の少ない美術館・博物館の設計にチャレンジできるチャンスということもあって、プロポーザルに応募することに決めました。応募時点で南方熊楠記念館新館では審査員が公表されていたので、その顔ぶれを見て、この先生方であればきちんと設計者を選んでいただけるだろうなと思えたことも応募を決めた理由の1つでした。

— 設計するにあたって、提案されたことは？

赤松さん：このプロジェクトの対象地は半島の先端にあり、地形としても崖のてっぺんにあるような立地で平地も少なく、ここに建物を建てるのか、とってしまうほど条件が難しい印象でした。まずはこの敷地条件にどのように対応すればよいのか？ということを考えて提案を行いました。自然が豊かなところなので、環境に負荷をかけないようにできるだけ樹木を切らないことや、地形を意識して片持ちで崖の方に張り出さないことなどを考えました。その結果、地形に沿い、樹木を避けるような形態が決まりました。とにかく自然環境の中に溶け込むような建築のつくり方をしようという思いが強かったですね。

全体の構成としては、1階は半屋外空間となるピロティとガラス張りにすることで自然が“浸透する”空間に、2階は展示室としてしっかりと“閉じる”、屋上は360度景色を眺められるので“開く”、というように、階ごとのコンセプトを掲げました。

— デザインレビューに対して、当初はどのような印象でしたか？

赤松さん：設計者として選定いただいた後に、審査員の先生方が中心となってレビュアーも担当して景観デザインレビューをすることが決まりました。正直に言うと、当初はどんなことが指摘されてどんな議論になるのか予想がつかみませんでした。ただし、この先生方であれば無茶なことはおっしゃらないだろうし、建設的な議論ができる場であればこちらとしても積極的に取り組

みたいということで、大きな不安はありませんでした。対話型で協議を進める景観デザインレビューのようなプロジェクトはまだ一般的ではないですが、審査員の先生方と意見交換ができることは我々にとっても非常にありがたい機会でした。

もしも、建築の知識が少ない方やプロポーザル審査に関わっていなかった方がレビュアーになると言われていたら、何かとんでもないことを言われてしまうのではないかと不安に思っていたかもしれませんね。

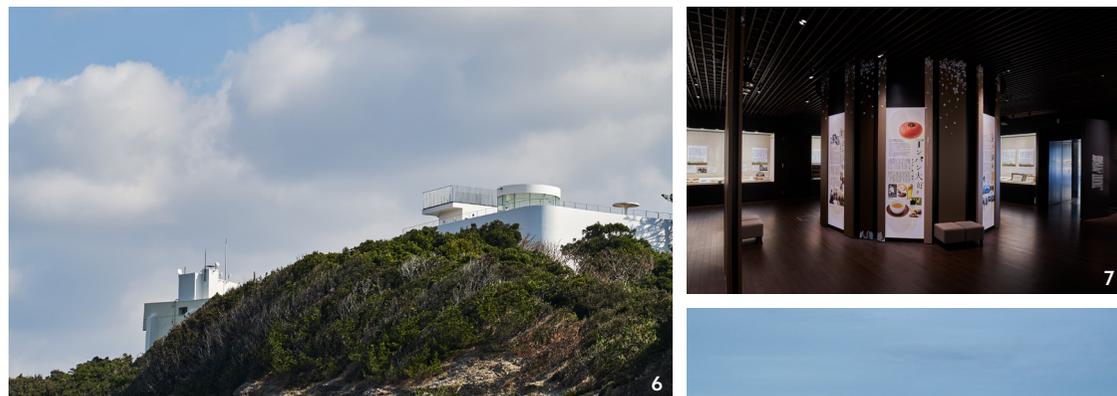
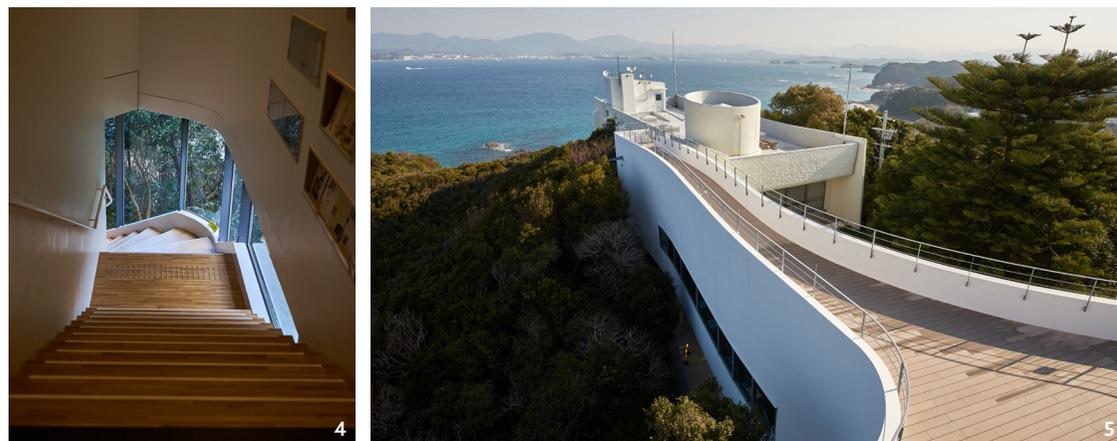
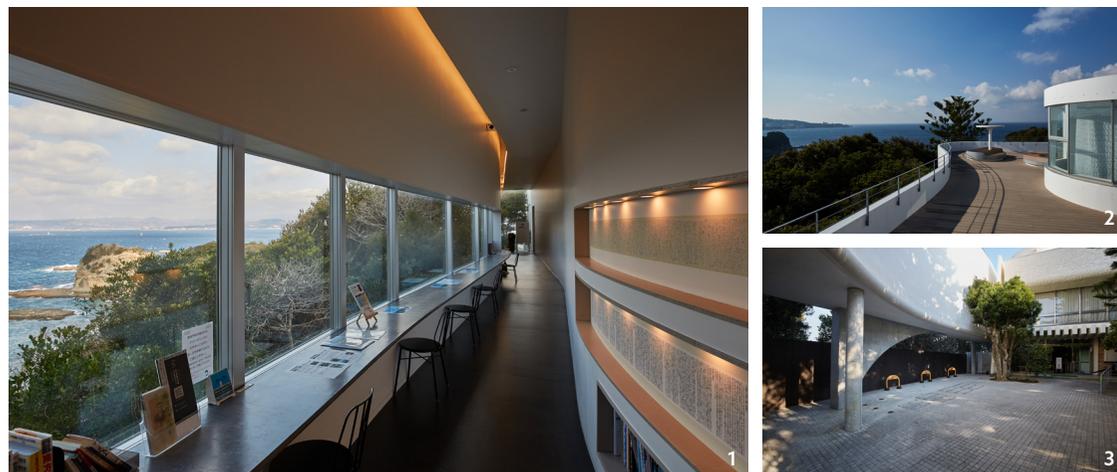
— デザインレビューの場で、どんなことを議論したのでしょうか？

赤松さん：今回のプロジェクトは、2015年9月から同年11月が基本設計、2015年11月から2016年2月までが実施設計というタイトなスケジュールでしたが、基本設計の終盤に1回目、実施設計の後半に2回目と、設計期間で計2回の景観デザインレビューを行いました。1回目では色々な指摘をいただいて議論を行い、それに対してどう反映させたのか2回目で確認しました。最初にお伝えしたように審査員の先生方がレビュアーだったこともあり、対象地の特性や我々の提案内容を理解してくださった上で、より良いものにしていくための議論を進めることができました。

ここは台風が多く来る場所なので、外壁にガラスを使うことに対する心配の声があり防風ネットによる対策を提案しました。他にも、植生が豊かな場所ですので、なるべく既存樹木を残すことや、屋上のルーフトラスから1階に貫くような仕組みで自然光を採り込む“ランタン”と呼んでいる部分について、夜間光ったときに灯台と間違われるのではないかと指摘などがありました。ランタンについては関係機関とも協議をしましたが、夜間光らせる案を通すことができました。鬱蒼としている山の上にポツンと光っているのが白浜のまちからも見え、景観のアクセントになっています。

— デザインレビューを通して変更された点は？

赤松さん：最も大きな変更点は、新館と本館をつなぐブリッジの接続位置を本館正面右側から左側に変更したことです。プロポーザル提案時点では、本館正面のエ



1.新館と本館を結ぶブリッジには、海を眺めながら読書できるスペースが用意されている。2.景色を360°見渡すことのできる開放的な屋上空間。条件が良い時は、ここから四国まで見通すことができる。3.本館入口前。デザインレビューによりブリッジ位置を変更したことで、光が差し込む心地良い空間となった。4.広いガラスから見える豊かな樹木と光。館内からも自然に囲まれているということを堪能できる。5.ブリッジの形状は、地形の等高線に合わせて曲線を描いている。6.ランタンと呼ぶ筒状のオブジェにより屋上からの自然光を1階まで採り込んでいる。南方熊楠の文字がプリントされたりポンを編んで作られている。7.常設展示スペースは窓を設置せず、“閉じた”空間とすることで、熊楠の歴史に没頭できる内容に。8.日没後、ランタンの優しい光と南方熊楠記念館が、灯台のような雰囲気。



ントランスホールから階段で上がってきたところにつながる設計でした。現地に行くときよく分かるのですが、右側にブリッジを接続すると本館に覆いかぶさるような格好になり、建物外観のファサードが隠れてしまうんです。本館は国の登録有形文化財に登録されている素晴らしい建築なので、正面は隠れないようにするべきではないか、という指摘が議論されました。

平面プランの変更でしたが、ブリッジの修正が主な部分だったので、基本設計終盤のタイミングということで変更可能な範囲でした。ブリッジを反対側に振ったことで、本館の入口前は明るい広場のような場所になり、ファサードにも光が当たるようになりました。この点をご指摘いただいて非常に良かった部分でした。

— 様々な専門家や関係者と対話をしながらデザイン調整を進める意義はどんなことでしたでしょうか？

赤松さん：行政の担当者など、クライアントとなる方は建物の設計や建設に関わった経験がないことが多いので、我々設計者は、敷地の条件やデザインの良し悪しなど色々なことを考えて提案していきますが、建築の専門家ではない方からすると建築家が勝手に自分のやりたいことをやってしまうのではないかと不安が多少なりともあると思うんです。設計者が言ったことに対してそれが本当に良いのかどうかの判断基準が分からないことが多いのではないのでしょうか。

互いの信頼関係は何度かやり取りをしていけば生まれてきますが、最初の頃、プロポーザルで選ばれた設計事務所が東京から来ましたというと、地元の方などはどこか反論してはいけいないんじゃないかと身構えてしまうのではと。レビュアーの先生方が行政側の意見も踏まえて設計者と対話しながらアドバイスしてくれる景観デザインレビューのようなものがあることでクライアントにとっては安心材料になると思います。



建物模型から地形(等高線)に沿った計画であることがよく分かる。

また、我々は都心でも行政等とデザイン調整を行った経験がありますが、民間開発事業ではそれぞれの街区ごとに進んでいくことが多いので、まち全体としてどうなるのかを共有しながら事業を進めることの難しさを感じています。例えば渋谷区の渋谷駅周辺エリアについてデザイン調整を行う“デザイン会議”のように街区同士や周辺環境との調和を図りながら事業を進めることも重要であると感じています。

南方熊楠記念館新館も都心のプロジェクトもデザイン調整は大変でしたが、景観デザインレビューの場がなければ相当違うものになっていたと思いますので、開催していただいたことは非常に意義がありました。

— 対話を通して行うデザイン調整に対して期待することとは？

赤松さん：公共建築でも民間事業でも、クライアントの事情で当初の提案から設計案が変更になっていくことがあります。プロポーザルで選定されても、実際の打合せではプロポーザルの担当とは違う部署から当初評価されていた内容を知らずに意見が出て、変更に向かうようなことがよく起こります。その際、何が重要なのかということを第三者的に意見を言ってくれる人がいるかないかでは進み方が変わってきます。できれば、景観デザインレビューでのレビュアーを担当するのが審査員の方であれば、クライアントの中でもきちんと位置づけがあると思いますし、提案の経緯も分かるので、スムーズに協議が進むのではないのでしょうか。

南方熊楠記念館新館の景観デザインレビューでは、設計対象だけでなく公園全体のサイン計画についての指摘もありました。設計時点では範囲外のため直接我々がディレクションすることはできませんでしたが、新館のサイン計画をお願いしたデザイナーさんから、まち全体のサイン計画についての提言書をお渡ししました。最近は入り口の公共サインも少し修景されてきている様子もあり、敷地単体だけでなく、まち全体も変わっていくことを願っています。

赤松佳珠子 | Kazuko Akamatsu
東京都生まれ / 1990年日本女子大学家政学部住居学科卒業 / 1990年シーラカンス(のちのC+A、CAt)に加わる / 2002年よりC+Aパートナー / 現在CAtパートナー、法政大学教授



白浜のまちと自然を一望できる眺望スポット「平草原展望台」から。写真奥の半島に南方熊楠記念館がある。



記念館の前には昭和天皇が熊楠を偲んだ和歌を刻んだ記念碑が建立されている。



館内ではオリジナルの音楽を特注のスピーカーで心地よく奏でている。



屋上展望デッキのサイン。まち全体のサインについての提言書も出された。



国の登録有形文化財に登録されている本館。その2階は、特別展示が開催されるスペースとして新館と共に活用されている。

建物の概要

所在地：和歌山県西牟婁郡白浜町3601-1
主用途：博物館
階数・構造：鉄筋コンクリート造・地上2階
敷地面積：8,580.16㎡
建築面積：374.98㎡
延床面積：555.48㎡
工期：2015年12月～2016年10月

設計者・関係者の概要 ※肩書はいずれも当時

建築設計：シーラカンスアンドアソシエイツトウキョウ/CAt
レビュアー：本多友常(摂南大学教授・和歌山大学名誉教授)
広谷純弘(和歌山大学客員教授)
西本直子(武蔵野大学非常勤講師)
江川直樹(関西大学教授)



幻想的な夕暮れ時の恩湯と音信川。長門湯本温泉を象徴する美しい景観を、まち全体でつくり上げている。

和の様式美を継承した平屋造り。広場側を全面ガラスにすることでパブリックな空間を演出。

歴史や地元の方の想いを引き継ぐ 今に伝える公衆浴場

神社の真下という特徴的な場所に位置し、地元の方に長年親しまれてきた恩湯の新整備。新施設の設計を担当した、設計事務所岡昇平の岡昇平さんに、広場や川との繋がりや空間の演出等を意識しながら、デザインで大切にしたい点や、専門家との意見調整を経て改善した点についてお聞きしました。

長門湯本温泉 恩湯 / 設計事務所岡昇平 岡昇平氏インタビュー



専門家からの俯瞰的なアドバイスにより 公共的な価値を高める建築デザインに

— 恩湯の設計に関わったきっかけは？

設計事務所岡昇平 岡昇平さん(以下、岡さん) :山口県の長門湯本温泉にある公衆浴場「恩湯」の施設整備・運営事業者を選定するプロポーザルが平成30年に実施されることになりました。

その際、プロポーザルの応募を予定していた老舗旅館の大谷山荘を運営している大谷さんから声をかけていただきました。私自身、建築設計と温泉運営に携わっていることもあり、喜んで参加させていただきました。

— 設計ではどのようなことを大事に提案されましたか？

岡さん：源泉の本質的なあり方を大事にしました。はじめて長門湯本に伺った時は旧恩湯はすでに解体された後でした。旧建物が建っていた場所は岩盤で、その岩盤の亀裂から源泉が自然湧出している状態でした。非常に珍しい源泉環境でしたのでとても驚きました。旧恩湯は近代的な温浴施設でしたが、温泉が吐水口までどのようにつながっているかわからない状態でしたので、解体されてはじめて源泉の状況がわかったのです。想像ですが、おそらく昔の人は岩盤から流れ出した温泉が溜まったところに入浴していたはず。そのイメージを軸にまず考えたのは、湧出する源泉を受けとめるような初源的な湯船をつくることでした。新しい恩湯の湯船は岩盤の直上にあって、湯船上部の岩盤から湧出する源泉は上から湯船にそそがれ、湯船下部の岩盤から湧出する温泉は、そのまま湯船の足元から湧出しています。そのため極めて鮮度の高い温泉が楽しめるようになっています。さらに、岩盤から湧出する源泉を見ながら入浴することができるようになり、本来の恩湯のあるべき姿になったと思います。かけ流しのため湯船の大きさは湯量に見合ったサイズとし、深さは旧恩湯と同じで1mとしています。子どもが成長とともに湯船に足がつく体験や記憶がとても貴重だという話を大谷さんからうかがい、旧恩湯の深さを引き継いでいます。

— 周囲との関係性において、デザイン面で意識したことはどのようなことでしょうか。

岡さん：ふたつあります。ひとつは、みそぎの湯としての

あり方です。恩湯のすぐ奥には住吉神社のある低い山が隣接しています。源泉はその山のふもとから自然湧出し、恩湯という尊い名前を持っているので、昔は身を清めるために使われていたであろうと思われます。そのため恩湯は神社の一部と見立て、デザインを考えていきました。音信(おとずれ)川の橋・恩湯・住吉神社が直線上にあるため、橋をアプローチとし、恩湯が神社の参道となるように、橋を渡った正面に恩湯の入り口を設け、廊下をまっすぐ進むと神社の階段につながる計画としています。

ふたつめは、周囲全体をひとつながりの一体空間とすることです。隣接する恩湯広場につながるよう、恩湯と、恩湯食(飲食棟)は恩湯広場を挟むように配置されています。2つの建物は恩湯広場に向かって大きな窓、深い軒と縁側でつながっています。窓を全開にすることもできるようになっていて、縁側に腰をかけたり、建物が舞台のように使われることを想定しています。

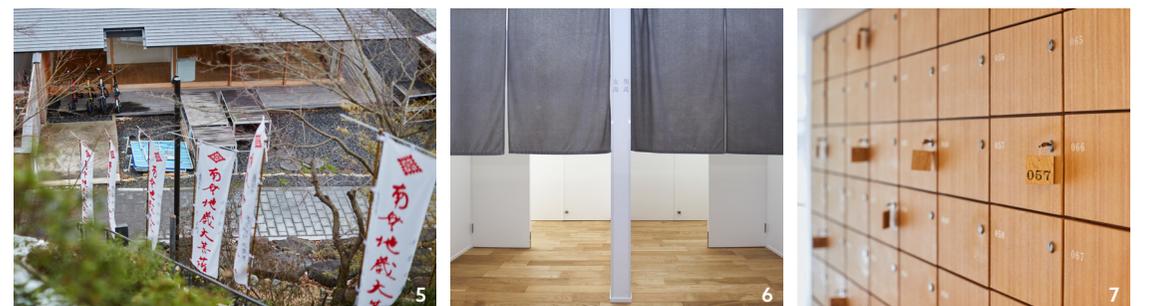
— 長門湯本温泉恩湯のプロジェクトでデザインレビューがあると知った時期はいつですか？

岡さん：プロポーザル時からデザインレビューの実施は決まっていました。長門市が平成31年の景観条例施行の準備を進めていたので、条例に適合し得るデザインとなるかという観点も踏まえてデザインレビューが行われました。

基本設計の間で3回実施され、レビューは恩湯のプロポーザル審査委員や地元専門家の方など5名で構成されていました。並行して月に1回行われていた「デザイン会議」では、発表者と地元の方や長門湯本温泉観光まちづくりに関わる方が円卓形式で議論していたのですが、それに対してデザインレビューでは発表する側とコメントする側がきっちり分けられていて、質問に対してしっかり回答することが求められる形式でした。

— デザインレビュー時のやり取りは？

岡さん：まず私たちが建物のプレゼンテーションを行い、レビューの方々から段差の解消や軒と縁側の関係、屋根の銅板は硫化銅板として黒色に経年変化するといった、大枠から細部に至るものまで、多岐にわたっ



1.深さ1mの浴槽の奥には、しめ縄が張られた岩盤からお湯が湧き出る様子を見ることができ。2.洗い場の照明はデザインレビューの意見も踏まえて細やかに調整されている。3.広場を向いた縁側は、自由に腰かけたり舞台のように使える空間をイメージした設計。4.入浴者専用の休憩スペースは、広場に面した開放的な空間。湯上がりの体をゆっくり休めることができる。家具は香川県産の家具ブランドによる専用設計。5.住吉大明神からのお告げによって発見されたと伝えられている「神授の湯」は、丘の上の住吉神社との動線も大事にしている。6.7.館内のサインや調度品は直線的でシンプル、かつ素材の質感を大切にデザインされている。8.住吉神社。神社の足元から自然湧出する尊さのあるお湯が恩湯に流れている。



て質問やコメントをいただきました。質問については一旦受け止めて、次回に回答するという進め方が多く、コメントを反映した部分、他の事項との優先順位の関係から反映できなかった部分を丁寧に説明し、デザインのあり方を共有してきました。

— デザインレビューを行ったことで、設計に変化はありましたでしょうか？

岡さん：建物の大きさやお風呂の位置など根幹的な箇所はそれほど変わらなかったのですが、細部で変更があった部分は多々ありました。意見を直接反映したところもあれば、アドバイスを受けて設計案をブラッシュアップしたところもあり、デザインレビューの期間を通して設計が少しずつ変わっていきました。特に建築計画やデザインが専門の熊本大学の田中先生からは、視野が広がるコメントをいただいたので、少人数の価値観で建物を設計するのではなく、俯瞰的な視点も踏まえることができたことで、恩湯の公共的な価値がより高まったと感じています。

— デザインレビューの意義とはどんなことでしたでしょうか？

岡さん：私自身10年以上前から、ロンドン等でのデザインレビューが行われていることは知っていましたが、日本での普及状況までは詳しく知らず、恩湯の設計で初めてデザインレビューを体験することになりました。デザインレビューに対して、建築家の視点のみで設計するのではなく、公共性が高い建築の価値を高める点で有効な手法だと感じていました。実際に体験して、部分最適だけではなく全体最適を検討することで公共の価値を大切に設計できたのではないかと考えています。

— デザインレビューに期待することとは？



音信川には飛び石や川床、足湯が整備されており賑わいのある場所に。



ライトアップイベント開催時の夜景。恩湯内部からの光も華を添える。

岡さん：デザインレビューを行う上で、重要なポイントが2つあると考えています。

1つ目は、より社会的な価値を高めていくために、今回のように俯瞰的な視点で価値や意味の大切さを理解されているレビュアーがいることです。

2つ目は、時期と回数を適切に設定することです。恩湯の設計では、全体のコンセプトがある程度固まった後に、ブラッシュアップを図るというデザインレビューでしたが、最初のコンセプトや機能を考える段階からレビューを行うことも有効だと感じています。

— 最後に長門湯本温泉「恩湯」について、今後期待することは？

岡さん：恩湯の設計に携わる中で、岩盤からの自然湧出、神社・川・広場などの周辺環境や、この場所ならではの特徴、旧恩湯に対する地元の方の想いを大切にしながら進めました。デザインレビューを通じて、レビュアーの方々からいただいたアドバイスを基にデザイン調整ができたことで、より価値が高い建築が出来上がったと考えています。地元の方はもちろん、多くの方々に恩湯にご入浴していただければ嬉しく思います。

岡昇平 | Shohei Oka

1973年香川県生まれ / 1997年徳島大学工学部卒業 / 1999年日本大学大学院芸術学研究科修士課程修了 / 1999～2002年株式会社みかんぐみ / 2002年設計事務所岡昇平設立



飲食店「恩湯食」（左側）と恩湯（右側）が、恩湯広場を挟んで向かい合い、音信川と一体的な空間となり、温泉エリアを代表する象徴的な場所に。



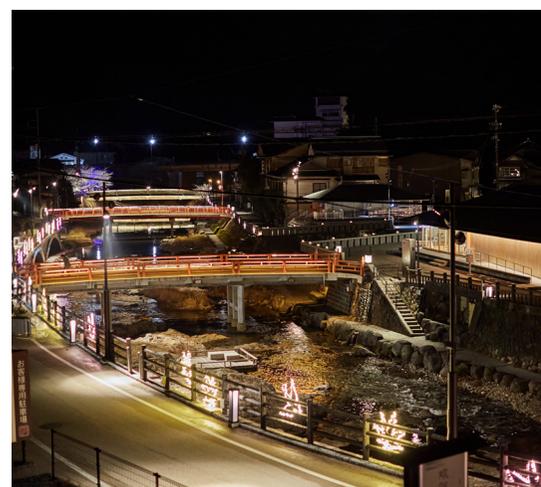
長門湯本温泉の案内図。見どころや地域の歴史を、統一されたシックなデザインで伝える。



恩湯側には電動アシスト自転車や高級折りたたみ自転車のレンタルサービスがある。



音信川沿いの道路の所々に設けられた狭さく部は、温泉街を“そぞろ歩き”するときの休憩場所として活用されている。この施策で路上駐車がほぼ無くなったとのこと。



ライトアップされた音信川と橋、その沿道の景観が、長門湯本温泉を象徴する風景となり、恩湯もその一部を担っている。

建物の概要

所在地：山口県長門市深川湯本2265
 主用途：公衆浴場
 階数・構造：鉄骨造一部木造の平屋建て
 敷地面積：719.90㎡
 延床面積：275.35㎡
 工期：2019年4月～2020年2月

設計者・関係者の概要 ※肩書はいずれも当時

建築設計：設計事務所岡昇平
 レビュー：
 田中智之（熊本大学大学院 教授（恩湯事業者公募審査委員長））
 金光弘志（有限会社カネミツヒロシセッケイシツ 代表）
 益尾孝祐
 （株式会社アルセッド建築研究所 主任（デザイン会議メンバー））
 長町志穂（LEM空間工房 代表取締役（デザイン会議メンバー））
 山根満広
 （有限会社山根建築設計事務所 代表取締役（地元専門家））

長門湯本温泉 恩湯



朝の大井町駅周辺の通勤時間帯。往来が多い道路と、線路との間の細長い敷地の中に、搭状の建物群がそびえる。

線路越しに見た各棟のトイレ。用途ごとに建物の高さや大きさが変えられている。

まちの風景に溶け込む、新しいトイレの形の提案

大井町駅前の道路沿いに現れた、一見トイレに見えない5棟の建築物。設計を進めるにつれて課題があったものの、デザインレビューでのアドバイスにより、当初の計画を踏襲しながら、プロジェクトを進めることができたとのこと。設計を担当した、あかるい建築計画の川嶋貫介さんに話をお聞きました。

大井町駅前公衆便所／あかるい建築計画 川嶋貫介氏インタビュー



デザインコンペ時の良さを残しながら 専門家と見出したトイレデザインの解決策

— 大井町駅前公衆便所の設計に関わったきっかけは？

あかるい建築計画 川嶋貴介さん(以下、川嶋さん)：大井町駅前公衆便所の設計は、当時のあかるい建築計画という事務所で私、斎藤信吾、根本友樹の3人で携わりました。設計者を選ぶデザインコンペは、日本建築家協会(以下、JIA)が、若い建築家や公共建築の設計実績がない会社にもチャンスを広げていくための発注者支援業務の一環で、デザインレビューを実施する取組みの第1弾として行われました。従来のデザインコンペでは豊富な実績が募集要件となることが多いですが、この案件はデザインレビューを実施することを条件に参加ハードルが低いという特徴がありました。我々も出せるコンペを探していたときに見つけて応募しました。実際には200件以上の応募があり、その中で最優秀賞を得ることができました。

— 設計者を選出するためのプレゼンテーションで、どのような提案をされましたか？

川嶋さん：3つのコンセプトを掲げ、それを大事にして設計に取り組みました。

1つ目は「美しいまちの風景をつくること」です。公衆トイレというのは敷地の隅の目立たない場所に追いやられることが多いので、往来が多い道路沿いの細長い敷地に、「新しいまちの風景」となるものを提案したいと考えました。

2つ目は「綺麗に使いたくなるトイレをつくること」です。トイレとして見えてしまうほど汚く使われてしまいうすいので、あまりトイレらしく見えないデザインを考えました。また、臭わない状態にすることで綺麗に使いたくなると考え、高さがある建物にして煙突効果で空気を自然に排気することができる設計にしています。

3つ目は「これからの社会に適したトイレをつくること」です。どんどん多様化している社会の中で、昔から男性用・女性用トイレ、それらの真ん中に多機能トイレという公共トイレの配置のフォーマットがずっと昔から変わっていないことに気付き、疑問を持ったんです。コンペの要綱には男性用と女性用を別に設けることになっていましたが、多様化の社会、ジェンダーレスの社

会に対応するためには、男女関係なく使うことを提案し、採用に至りました。

— 選出された後、まず始めに行ったことについて教えてください。

川嶋さん：線路至近の場所なので、工事時間は1日あたり夜中の2時間程度しか取れないことがわかりました。コンペ時は鉄骨のフレームを現地で組み、外壁材を貼るという工法を提案していましたが、現場作業の時間を抑える必要が出てきたので、あらかじめ輸送可能な大きさで、工場で棟ごとに製作してから運ぶ工程を考えました。トレーラー会社や運送会社に確認したところ、12.5mの高さであれば輸送できることがわかったので、構造をすべて検討し直しました。

苦労はありましたが、むしろ余計な贅肉が取れ、シャープなデザインになったと思います。元々、パブリックアートのようなトイレをデザインしたいと考えていたので、最初のイメージにより近づいたと感じています。

— 大井町駅前公衆便所のプロジェクトでデザインレビューがあると知った時期はいつですか？

川嶋さん：コンペの要綱に、発注者支援業務の方々がデザインレビューをすることが明記されていました。実績がなくても応募できるメリットがあったので、自治体が安心するためにJIAがデザインレビューでフォローする仕組みを理解できました。

デザインレビューの回数は、基本設計で1回、実施設計で2回の計3回実施されました。2週間くらいになると事務局から調整事項を整理した一覧表が届き、対応の考え方について事前に事務局と数回やりとりしながら当日に臨みました。

— デザインレビュー時のやり取りは？

川嶋さん：事前に事務局から送られてくる調整事項は60～70項目ほどありました。質問に対して設計の意図や考え方を回答したり、詳細な図面で補足するといったことを事前に対応した上で、デザインレビューに臨みました。当日は模型を使ってこちらの考え方や事前調整事項の対応状況を説明し、異論があればさらに



1. JR京浜東北線や東海道線が頻りに停車・通過する大井町駅。鉄道至近でも、まちの風景に溶け込むシンプルな外観。2. 小さな施設ながらも高さを持たせたスタイリッシュな外観と、綺麗に使い続けられる機能性を兼ね備えたトイレ。3. 誰でも気兼ねなく利用できるよう、用途に応じて(6棟のうち5棟は)扉を線路側に設置している。4. 表面加工された鉄板を外装材に使用することで、光の当たり方で建物の表情に変化を与える。5. 多様化する利用者に対応するため、6つのトイレはそれぞれ仕様異なる。こちらは車いす対応となる広めのトイレ。6. 照明は敢えて壁沿いに設置し、吹き抜けになる天井から外の光も採り込む。7. まちに馴染む風景をつくるため、外装材に使用する鉄板は薄さ(厚さ4.5mm)を追求。8. 透水性アスファルトを使用し、親しみを持てる広場のような舗装とした。

追加の質問や調整を行う進め方でした。終了後は再度検討になった項目の確認・回答を繰り返しました。

レビュアーは意匠設計、設備、構造等といった様々な分野の専門家が担当してくれたことで、参考事例を教えてくださいたりアドバイスをいただきました。それぞれの専門家から質問が来るので、対応にはタフさも求められましたが、必要なところをきちんとチェックしていただけたので、デザインレビューの機会があったと感じています。

— デザインレビューでの議論が最も活かされたと感じた場面はどのような時でしたか？

川嶋さん：棟ごとに工場で作成し、現地で建方を行う方法に変更する話をしたときですが、レビュアーの方が元々あった案の良さをどのように残して解決していくかという視点でサポートしてくださいました。むしろ「コンペのときのデザインのコンセプトを、ちゃんと守った上で話を進めなきゃだめですよ」と、アドバイスをくれました。この案件はデザインコンペだったということもありますが、予算内に収めなければいけない状況の中で、デザインを変更したり、棟数を減らすことや建物を低くするという、元々のコンセプトに反する議論にはならず、第三者の専門家が当初のデザインを守ってくださったという点は非常に大きかったと感じています。

— デザインレビューの意義とはどんなことでしたでしょうか？

川嶋さん：このトイレは多くの人の目に触れる場所にあるので、良いまちの風景をつくるためには、我々と自治体担当者の少人数で設計を進めるより、色々な方々の意見を聞いて良かったということや、場所が特殊ということ、自分達の設計事務所としては初めての公共建築物ということもあったので、不安な部分をサポートいた



トイレらしく見えないデザインは、駅前風景の一部になっている。

だいて安心して進めることができたことが、デザインレビューのメリットや意義だったのではと感じています。

— 最後に、大井町駅前公衆便所は、今後まちとどのような関係性を持つことを期待しますか？

川嶋さん：大井町駅前には30階くらいの高い建物がある一方で、一本裏に入ると、細い道に飲食店等がひしめきあっています。都市的なスケールとヒューマンスケールが共存しているまちだと感じていました。そのため、小さな施設でありながらも、高さに変化をつけることで、都市の風景にも溶け込む大井町の特徴的な景観を表現したトイレをつくることができましたと感じています。

最初に提案した工法から大幅に変更になるなど課題もありましたが、デザインレビューで専門家の方々が第三者の立場からサポートし、当初のデザインを守ってくださったおかげで、元々の案の良さを保てることなく建物を完成させることができました。この大井町の特徴を集約したまちの風景として、今後も皆さんに親しまれ、綺麗に使われ続けると嬉しく思います。

川嶋貴介 | Kansuke Kawashima

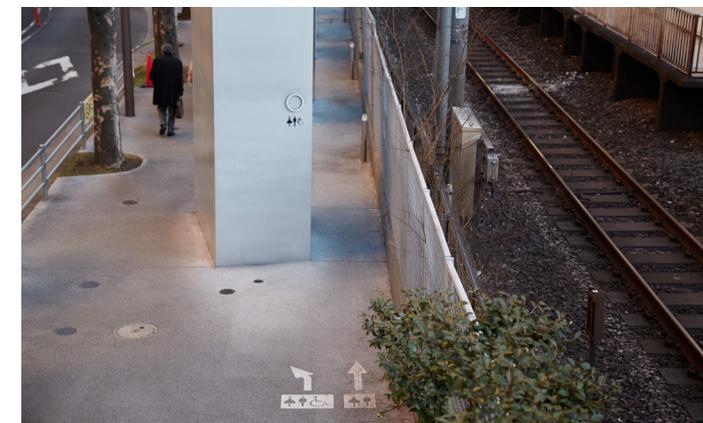
1974年東京都生まれ / 1997年早稲田大学建築学科卒業 / 2000年同大学大学院修士課程修了 / 1999～2006年妹島和世建築設計事務所+SANAA / 2006年かわしまかんすけ事務所設立 / 2009～2015年早稲田大学理工学総合研究所嘱託研究員 / 2014～2019年京都精華大学特任准教授 / 2018年あかるい建築計画共同代表 / 2020年～工学院大学非常勤講師 / 2021年～東京大学非常勤講師 / 2021年～武蔵野美術大学非常勤講師 / 川嶋貴介建築設計事務所代表



線路至近のため、工場で作材を組み立ててから運ぶ工程を採用。



男女関係なく用途によって使用するトイレを選ぶよう、各用途と男女のサインが表示されている。



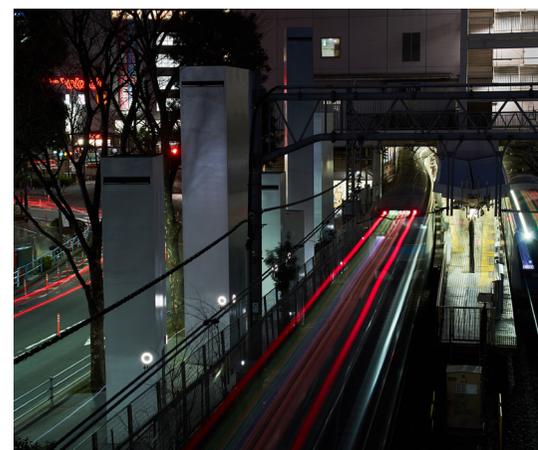
さりげなくトイレの存在を示すために路面サインを活用している。ピクトは1964年の東京オリンピック時に採用されていたデザインを使用。



敷地の一部には、下に暗渠が通っているため、そのスペースにはトイレは設置せず、シェアサイクルの駐輪用ポートとして有効活用している。



木漏れ日や周囲からの影が映り込みながら、時間帯によって表情を変える壁面。



夜は周りの光が壁に反射し、まちの夜景の一部に。建物の丸いライトはトイレの空き状況を表し、使用中は消灯される仕組み。

建物の概要

所在地：東京都品川区大井1-2-5,6
 主用途：公衆便所
 階数・構造：鉄骨造・地上1階
 敷地面積：427.32㎡
 建築面積：19.28㎡
 延床面積：19.28㎡
 工期：2019年10月～2020年8月

設計者・関係者の概要 ※肩書はいずれも当時

建築設計：あかるい建築計画
 レビュアー：千葉学(東京大学大学院工学研究科教授)
 日本建築家協会関東甲信越支部

大井町駅前公衆便所



山の稜線と同調する軒の連なりを感じる「ムカエル」と「ウマレル」。照明に照らされた建物が風の夜の内湾に浮かぶ。

斜面緑地で防潮堤の圧迫感を抑えながら、海に開かれるように建物の正面性を持たせている。

海・防潮堤・まちを緩やかに繋ぐ ウォーターフロントの実現

東日本大震災の復興まちづくりの際に検討が始まった防潮堤と一体となった商業施設ムカエル・公共施設ウマレル。計画及び設計を担当したLLC SMDWの阿部俊彦さん、アール・アイ・エー村山寛さんに異なる施設の設計者同士が自主的にデザイン調整を行い設計を進めた過程をお聞きました。

気仙沼内湾 ムカエル / LLC SMDW 阿部俊彦氏 (現在、立命館大学准教授)、
気仙沼内湾 ウマレル / アール・アイ・エー村山寛氏インタビュー



海とまちの繋がりを生み出すために 2棟に関わる設計者たちのデザイン調整

— 気仙沼の設計に関わったきっかけは？

LLC SMDW 阿部俊彦さん(以下、阿部さん)：東日本大震災直後、僕は早稲田大学の研究員でしたが、宮城県気仙沼市にいた大学OBの方から、一番街商店街の復興について相談を受けたのがこの地に関わる最初のきっかけでした。その後、2011年秋頃からの防潮堤整備計画に対する住民反対運動等が起きたこともあり、菅原昭彦さん(2012年6月に発足する内湾地区復興まちづくり協議会(以下、まちづくり協議会)の会長)から、模型を使って防潮堤の議論が出来ないかという相談を受け、まちづくり協議会を支援することになりました。

気仙沼市主催で、防潮堤を踏まえたまちづくりのアイデアコンペもあり、早稲田大学の研究室でまちと海の繋がりをもたせる提案をしました。コンペの最優秀賞は別の提案者でしたが、結局、防潮堤の維持管理面の課題からその提案が採用されず、僕たちの提案等も含めて検討が再開しました。様々な案を検討する中でまちづくり協議会から防潮堤と海を緩やかに繋げる斜面緑地でまちと一体性を生み出す商業施設のムカエルが提案され、私たちが設計に携わることになりました。

アール・アイ・エー村山寛さん(以下、村山さん)：私は、土木コンサルタントがこの地区の復興土地区画整理を検討する中で、気仙沼市が整備する公共施設のウマレルの設計の相談をされたのがきっかけでした。

— ムカエルとウマレルのデザイン調整をするようになった経緯は？

村山さん：阿部さんから、互いの施設のデザイン調整についてお声がけいただいて、一緒に議論しながらそれぞれ設計を進めることになりました。

阿部さん：それぞれ別の事業者となるため、別々の設計で異なったデザインになるのを懸念していました。気仙沼市もウマレルに対するデザインの想いがあったので、まずは設計者同士で考え方をすり合わせた方が良くと考え、村山さんたちにお声掛けしました。

村山さん：私たちも普段から建築を通してまちづくりに貢献することを考えているので、今回は特殊な場所での設計ということもあり、互いの施設を一体に考える

必要があると感じていました。

— 専門家同士のデザイン調整で特に大事にしていたところは？

村山さん：気仙沼は漁師町として発展したので、海とまちの関係性を大事にしているんです。そこで「海とまちを繋ぐ」「人と人を繋ぐ」という2つのテーマを掲げました。ウマレルには市民や観光客が無料で利用できる内湾ラウンジや軽運動室等がありますが、海側とまち側をガラス張りにしてまちから海への視覚的な繋がりをつくることを意識しました。同様に、ムカエルとウマレルの間の広場も、海とまち両方から見通せる開放的な空間とすることを意識しました。

阿部さん：動線として互いに行き来しやすいことは当然ですが、防潮堤があっても海とまちが緩やかに繋がる工夫については、かなり意識しました。それから、ウォーターフロントエリア全体の屋外のランドスケープや照明の統一性も重視していたので、オンサイト計画設計事務所の長谷川さん、ぼんぼり光環境計画の角館さんにも検討に加わっていただきました。

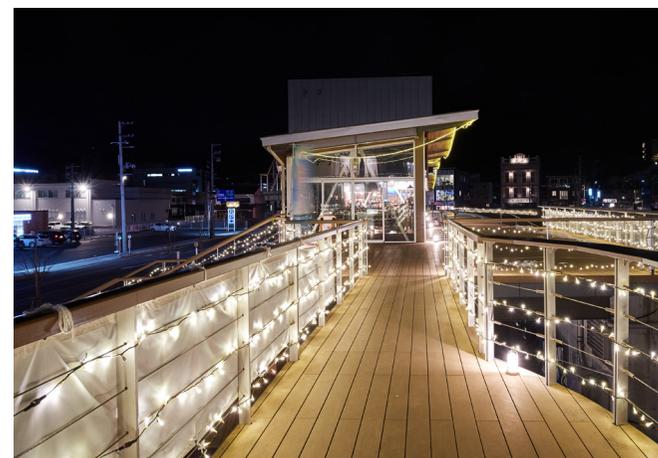
本当は、行政も含めて一堂にデザイン調整をできると良かったのですが、元々デザイン調整会議を行う位置づけも予算もありませんでした。私たちは復興のために力を尽くしたいという想いがあったので、設計者同士で予算を持ち出す形で調整を行ったんですね。

村山さん：ウマレルについては事業者である市の希望を聞きつつ、それも踏まえてデザイン調整の機会で、チームの考えをすり合わせていきました。

— 異なる建築に対して、どのように調整を進めましたか？

村山さん：お互い模型を持ち寄って、試行錯誤しながら議論を重ねていきました。特に変わったのは、デッキを繋ぐ動線や階段の配置でした。最初はまちと海の見通し軸方向の階段でしたが、地区全体の回遊性や歩く楽しさを考えて向きを変えました。2つの建物の連続性を強く意識していたので、向かい合う部分の軒の高さも何度も調整して合わせました。

阿部さん：ランドスケープの模型をつくってくれたオンサ



1.防潮堤上部のデッキで双方の建物を繋ぎ、海側は緩やかな斜面緑地にすることで、海とまちの繋がりを創出。2.市民や観光客が無料で利用できるウマレルの内湾ラウンジは海とまち両方に開かれたガラス張りの空間。3.移動式の仕切りで研修室などの大きさを調整できるウマレルの3階スペースは互いの活動も見える空間。4.デッキや外壁は双方の設計者同士で色味や素材感を調整して雰囲気合わせた。ウォーターフロント全体でも一体感を演出。5.カフェや飲食店が入るムカエルでは、内湾を眺めながら食事やコーヒーを楽しめる。6.デッキの柵は透過性を重視してワイヤーを採用。夜間はライン照明で光が溢れる空間に。7.ウマレル1階の防潮堤内側は、駐車場スペースとして活用。上層のガラス面で視線の見通しを確保。8.トイレのサイン等、細やかな部分にもデザインを気配り、利用者の親しみを生み出す。

イト計画設計事務所で5回ほど皆で集まって、意見交換しましたね。外構や細かい空間のつなぎ方等は個別にやり取りもしていたので、デザイン調整自体はかなりの回数を行いました。

特に防潮堤の中央陸間周辺は開放感が重要だったので、互いに建物の高さを抑えて、それぞれの施設の入り口に視線が行くようにしています。

村山さん：建物同士の間のエントランス広場から見て、お互いの壁面を後退させ、高さも抑えることで開放感を持たせ、その上を通るブリッジもできる限り細くして見通しを遮らないようにしました。2階の屋外デッキ部分は、防潮堤の高さから一段下げた場所を海側に設け、かつ手すりの高さも下げることによって、人が座りながら海を眺められる工夫もしました。

阿部さん：海とデッキの視線の抜けを良くするため、手すりの横材をワイヤーにしています。維持管理を考えるとあまりワイヤーを使わないのですが、透過性が勝る素材はないので採用しました。

デッキや外壁は、実は施設ごとに材質が異なりますが、雰囲気近くするように色味を調整し、納得がいく仕上がりとなりました。屋根も違う材質ですが、山側からの見え方を考えながら、調整しています。

— 設計者同士で議論しながら設計の質を高める意義はどんなことでしょうか？

村山さん：同じ人が両方ともデザインすると単調になることがあります。施設ごとに異なる設計者が議論して調整したことで、統一感はあるながらも個性が出る効果があったと感じています。今回は複数の設計者がいることで様々なアイデアが出ましたし、居場所となる空間の種類も増えました。デザインの統一性という点では、ランドスケープや照明の役割も大きいので、両施設共、同じ専門家に担当していただいたことも良い



設計者同士のすり合わせに活用した湾の敷地と両施設全体の模型。

バランスになった要因です。

阿部さん：皆バックグラウンドや経験が異なるので、得意不得意がわからない状況でしたが、対話を重ねることで、それぞれの考えへの理解が深まり、互いに良い部分を取り入れ合うことで地域にふさわしいデザインが見えてくると感じました。

もちろん、それぞれの考えがあるので、議論をした上で同じデザインにしても良いし、別々になっても良いんです。対話せずに別々に正しいと思うことをするのは、対話を通して最も良いと判断するということが何より大事だと僕は考えています。

— 気仙沼内湾 ムカエル・ウマレルについて、今後期待することは？

阿部さん：海とまちの繋がりがある暮らしが体感できる、それにふさわしい空間を実現したいという想いで取り組んできたムカエルとウマレルですが、設計者が異なるため、チームとして一体感をもって議論を積み重ねたことで良い結果となりました。これからも地域の方々の暮らしに寄り添った過ごしやすい場所として、愛され続けて欲しいと願っています。

村山さん：当初から大事にしてきた「海とまちを繋ぐ」「人と人を繋ぐ」というテーマに沿って完成しました。互いの持っている理念が異なっていたらスタートラインから大変だったかもしれませんが、近い想いを持っているチームだったのが良かったと感じています。これからも海・まち・地元の人・観光の人等が繋がりがあう場であり続けると嬉しく思います。

阿部俊彦 | Toshihiko Abe

1977年東京都生まれ／早稲田大学大学院修士課程修了／2008年LLC SMDW設立／立命館大学理工学部建築都市デザイン学科准教授／内湾ウォーターフロントは土木学会デザイン賞(優秀賞)・日本都市計画学会賞(計画設計賞)・グッドデザイン賞などを受賞



村山 寛 | Hiroshi Murayama

1967年東京都生まれ／明治大学工学部建築学科卒業／アール・アイ・エー取締役東京本社設計本部長



正面はムカエル。右側は内湾を囲むために新設された防潮堤。船溜まりと隣接した位置関係から、漁師町として発展してきた歴史を感じることができる。



マルシェなどのイベントも行われる広場には津波の危険性や誘導ルートをサインで表示。



内湾の広場で定期開催する「ないわん朝市」。生鮮野菜などが並び、賑わいを見せる。



照明デザイナーも検討チームに加わり、水面に浮かぶ港にふさわしい夜間景観を演出。



中央陸間側に面する「ラチオ気仙沼」の放送局。ガラス越しに公開放送の様子を見ることができ、音声はスタジオ外にライブで流れている。

建物の概要
 所在地：宮城県気仙沼市南町海岸1-14
 主用途：飲食店・物販店舗・事務所
 階数・構造：鉄骨造・地上3階
 敷地面積：1,176.05㎡
 建築面積：765.73㎡
 延床面積：1,169.28㎡
 工期：2017年8月～2018年10月

設計者・関係者の概要 ※肩書はいずれも当時
 建築設計：LLC SMDW

気仙沼内湾ムカエル

建物の概要
 所在地：宮城県気仙沼市南町海岸1-11
 主用途：観光案内所・交流スペース・FMスタジオ・軽運動場・研修室・音楽室
 階数・構造：鉄骨造一部鉄筋コンクリート造
 敷地面積：2,025.76㎡
 建築面積：1,291.53㎡
 延床面積：2,403.42㎡
 工期：2017年9月～2019年3月

設計者・関係者の概要 ※肩書はいずれも当時
 建築設計：アール・アイ・エー

気仙沼内湾ウマレル



開放感溢れる「アトリウム」。市民の憩いの場やイベントの場として活用し、平日休日問わず多くの人が訪れている。

市庁舎全景。生糸をモチーフとした外装のセラミックプリントはエネルギー効率化の効果も。

まちの繋がりを生み、 市民に開かれた市役所

2014年、市民に開かれた横浜市役所市庁舎の建設に向けて、翌年12月、設計チームの選定を経た後、数々のデザイン調整が進められてきました。当時、設計に携わられた竹中工務店の酒向昇さん、高橋健人さん、槇総合計画事務所の池田偉佐雄さん、中村周さんにデザイン調整の過程についてのお話をお聞きしました。

横浜市役所／竹中工務店 酒向昇氏、高橋健人氏、
槇総合計画事務所 池田偉佐雄氏、中村周氏 インタビュー



魅力や活動が生まれる市民スペースと 水辺にふさわしい庁舎建築

— 横浜市役所の設計に関わったきっかけは？

楨総合計画事務所 池田偉佐雄さん(以下、池田さん)：楨総合計画事務所の池田です。以前の横浜市役所は約20か所の周辺ビルに執務室が分散していましたが、業務効率の低下や多額の賃借料負担があり、東日本大震災が発生したことから危機管理機能強化も求められていました。一方で2003年に竣工したアイランドタワーの横の敷地に新庁舎整備の白羽の矢が立ったのですが、私たちはアイランドタワーの設計担当としており、隣のこの場所の利活用も提案していたので、横浜市役所の設計にも携わりたいと考えました。

竹中工務店 高橋健人さん(以下、高橋さん)：竹中工務店の高橋です。アイランドタワーの施工は竹中工務店でしたので、隣接する横浜市役所も同じ事務所が携わった方が良く、共に敷地の利活用を考えていたこのチームで、設計者と施工者を一括で決める事業者選定に臨みました。

— 市役所という大規模で特殊な建築物に対して、どのような提案をされましたか？

池田さん：三角形の敷地の角にシンメトリーに配置されたアイランドタワーに対して、横浜市役所も一体性を感じられる形状とし、ランドマークタワーをピークに、横浜市役所、アイランドタワー、関内地区の低層建物の順で高さをなだらかに変化させながら、それぞれの関係性を提案しました。

みなとみらい地区の景観形成ガイドラインでは水辺が白色系だったので、大岡川と隣接したこの場所もどのようなコンセプトで白色を表現するかを話し合いました。その中で横浜港が発展した経緯はシルクの輸出であり、竹中工務店からそのイメージをかたちにできないかとの提案のもと、ガラスにセラミックプリントでシルクのつややかさを出す外装が決まりました。

高橋さん：時間帯ごとの陽の入り方を計算してセラミックプリントを配置し、さらにダブルスキンカーテンウォールで外気影響の低減を図ることで、同規模の建物より消費エネルギーを抑えることに配慮した外装デザインとしています。

また、災害時等の業務継続対応にも力を入れてお

り、ロビーがある3階の下に免震層を設けた中間免震構造とすることで、どんな時でも安全で、地上面に可動物がなく、イベント広場の活用に影響がない建物です。

— 横浜市役所のプロジェクトでデザインレビューはどのように進められましたか？

池田さん：実は、2016年4月にあった横浜市役所のデザインレビューは計画案を発表するイベントのようなものでした。横浜市では事業者選定前に、新庁舎がまちづくりで果たす役割についてデザインコンセプトブックが作成されており、デザインの方向性が整理されている中で検討を始めました。横浜市的美観向上を図るためにデザイン調整を行う「都市美対策審議会」の存在も非常に大きく、全4回の協議を進める中でデザインの方向性が、より明確になりました。

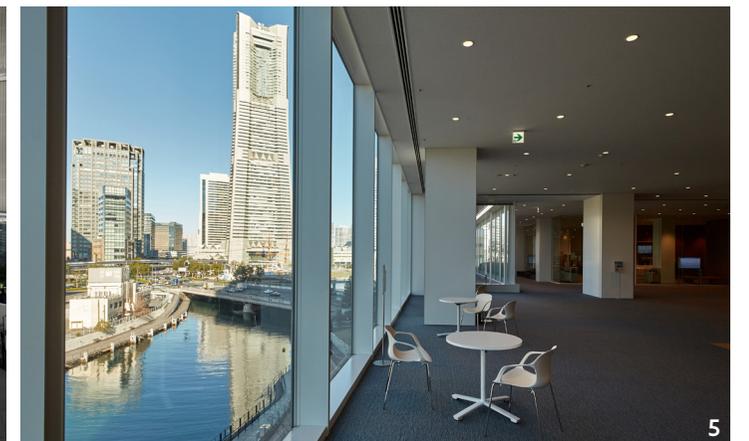
— デザイン専門家とどのような議論をしましたか？

楨総合計画事務所 中村周さん(以下、中村さん)：楨総合計画事務所の中村です。都市美対策審議会では、低層部が来訪者の滞留や活動が生まれる空間となるかという視点で議論し、空間細部のデザイン調整を進めました。特に、市役所南側の緑化や店舗の並びは当初案から大きく変わりました。

池田さん：この敷地は大岡川と道幅が広い道路に囲まれているので、都市計画が専門の横浜国立大学 野原先生は、陸の孤島になることを気にしており、ここに人を導く方法を議論しました。都市美対策審議会以外にも委員とデザインの方向性や緑化の仕方、夜間景観等も調整しました。

竹中工務店 酒向昇さん(以下、酒向さん)：竹中工務店の酒向です。市民ワークショップも野原先生が上手くコーディネートしてくれました。市役所なので、横浜市民もたくさんのお見解がありましたが、議論が発散しないように、野原先生が特に設計に反映すべき意見を整理していただきました。

池田さん：市民の皆さんからの意見はパブリックとプライベート、ソフトとハードの二つの軸で意見を整理し、ソフトな部分は運営で工夫しつつ、パブリックな視点はハードな部分として設計に反映しました。



1.大岡川に面したデッキには、市民活動によってつくられた緑化スペースが充実。バラをはじめとした様々な花を一年中楽しめる。2.市民の活動発表の場として活用できる市庁舎の通路に面した展示スペース。3.低層部(1~3階)には飲食や物販等の店舗が並び、4.フォーラムや交流会、表彰式や演奏会などのイベントが頻繁に行われている空間「アトリウム」。5.誰でも利用できるベンチやテーブルが充実。写真は行政棟のエントランスとなる3階の様子。6.「市民ラウンジ」は、みなとみらいの風景が一望できる場所。夜は20時まで土日も開放。7.都市型のロープウェイが開業するなど周辺でも変化を見せる中で、横浜市役所新市庁舎も、みなとみらいの新たな風景の一部に。8.大岡川沿いの野外デッキに溢れ出る内部からの光。



— 様々な専門家等が関わりながら、建物のデザインはどのように調整していったのでしょうか？

高橋さん：竹中工務店と横総合計画事務所で設計を行いました。デザイン監修者の立場から横総合計画事務所 横文彦名誉顧問の客観的な発言も踏まえて検討を深めました。横さんや都市美対策審議会など複数の視点でデザイン調整ができたのは良かったです。

酒向さん：他にも、工事中に江戸末期の石積み護岸等の遺構が多く出た際は、遺構活用委員会の歴史保全やランドスケープの専門家と協議し、屋外デッキの展示物として保存・活用する方向としました。植栽は、バラを植える提案をいただいた神戸国際大学の白砂先生と議論し、緑化の方向性を整理しました。

池田さん：当初、維持管理の負担が少ない植栽としていましたが、結果的に一年中、花で溢れるデザインになったりと、協議の中で教わった部分もあります。市の環境創造局からも緑化に対する助言があり、デザインコンセプトブックにあった水辺「を」開くイメージに近い緑の空間ができました。

— 対話によるデザイン調整で良かったことは？

池田さん：一番大きく変わったのは低層部です。普通の市役所は休日に人は来ませんが、横浜市役所の市民スペースが、よく利用されるように運営面を含めて議論しました。アトリウムはアイランドタワー同様に、南側と北側の歩道からの視線を遮らない工夫をしているので、まちの結節点として人が行き交う空間になりました。アトリウムは今でも継続して多くのイベントや展示が行われています。

高橋さん：市役所の内部・外部両面からの店舗を視認できアクセス可能なレイアウトにしたことも、周囲の回遊性向上に貢献できているのではないのでしょうか。

酒向 昇 | Noboru Sako

1964年東京都生まれ。1990年武蔵野美術大学大学院造形研究科デザイン専攻建築コース修了／竹中工務店北海道支店設計部長



高橋 健人 | Takehito Takahashi

1974年京都府生まれ。1992年京都大学工学部建築学科卒業／1998年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了／Skidmore, Owings & Merrill / 竹中工務店東京本店設計部設計第1部門設計3グループ長



— 様々な専門家や関係者と対話をしながらデザイン調整を進める意義はどんなことでしたでしょうか？

池田さん：横浜市は1965年に都市美対策審議会が設立され、都市デザインの歴史がある自治体です。だからこそ今の横浜の景観がありますが、このような方々と一緒に重要なプロジェクトに携われたことは、とても有意義だったと感じています。

中村さん：様々なデザイン調整をする中で、新たな視点が追加されていきましたが、これは建築物を魅力的にする上でとても重要です。建築に愛着を持ってもらうことが大事だと横からよく言われますが、デザイン調整やワークショップは様々な人が関わり空間の質を高めるだけでなく、親しみを育む機会にもなったと感じます。

酒向さん：様々な人との議論が常に良い方向に繋がるとは限りませんが、今回のプロセスでは、連携することで1つでも良いアイデアが生まれればと考えていましたし、結果的に良い市庁舎になったと感じます。

高橋さん：横浜市役所は、専門家が設計者の意図を共有いただき、効果的なデザイン調整ができましたし、我々も安心感を持って議論できたのも互いに有意義に進める上で大きな意味があったと感じています。

— 最後に市役所整備をきっかけに周囲のまちづくりに対して、今後期待することは？

池田さん：周囲には、みなとみらい・野毛・元町・伊勢佐木町といった特性の異なるエリアがあり、市役所は色々なエリアへの繋がりを生む場所になっています。低層部は市民が自由に活動する空間を意識して設計しましたが、特に3階の市民ラウンジは初代横浜駅(現桜木町駅)からみなとみらいまで一望できる場所なので、この風景が大事にされ、まちと繋がりを持った市役所になってほしいと感じています。

池田 偉佐雄 | Isao Ikeda

1964年茨城県生まれ。1986年神奈川県立神奈川大学工学部建築学科卒業／アルキメディア設計研究所、ラファエルヴィニオリ建築士事務所を経て、1998年横総合計画事務所主任所員

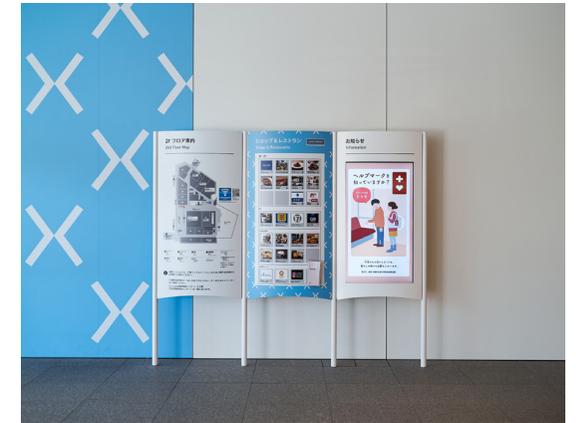


中村 周 | Shu Nakamura

1987年東京都生まれ。2016年 宇都宮大学大学院博士後期課程単位取得満期退学／2016年 横総合計画事務所／2017年 博士(工学)取得



吹き抜けの開放的な空間「アトリウム」内にある、みなとみらい地区の屋外サインとデザインを合わせた案内板。



低層階には壁面と一体性がありつつも、視認性を確保した館内サインを設置。デジタルサイネージも併用している。



少し離れた場所となる桜木町駅から、来訪者を導く架け橋となる「さくらみらい橋」。屋根付きデッキのため雨の日でも快適に移動できる。



建設時に発見された歴史的に価値のある遺構を敷地内に保全。



歩道に面した市庁舎のエントランス前スペースには、地産地消のキッチンカーが定期的に出店し、昼時は賑わう場所に。

建物の概要

所在地：神奈川県横浜市中区本町6-50-10
 主用途：市庁舎(事務所)
 階数・構造：鉄骨造一部鉄筋コンクリート造及び鉄骨鉄筋コンクリート造 中間免震・地下2階地上32階
 敷地面積：13,142.92㎡
 建築面積：7,941.00㎡
 延床面積：142,582.18㎡
 工期：2017年8月～2020年5月

設計者・関係者の概要 ※肩書はいずれも当時

デザイン監修者：横文彦
 建築設計：竹中工務店 横総合計画事務所
 レビューア：野原卓(横浜国立大学准教授)
 小泉雅生(JIA神奈川副代表/首都大学東京教授)
 モデレーター：飯田善彦(JIA神奈川代表)

横浜市役所

デザイン調整時の各事例タイムライン

INTERVIEW ～景観まちづくりの現場から～で掲載した各事例について、デザイン調整に関連する出来事を一覧でまとめました。設計の条件や状況により、適切なデザイン調整のタイミングが異なるため、各事例を参考にしながらプロジェクト全体のスケジュールを組み立ててみてください。

那須塩原市図書館みるる

プロポーザル審査員選定、設計者選定の段階から、デザインレビューを実施することを前提に準備が進められている。デザインレビューは基本設計終盤と実施設計の序盤、終盤と設計のプロセスにおいて重要なポイントで行われている。



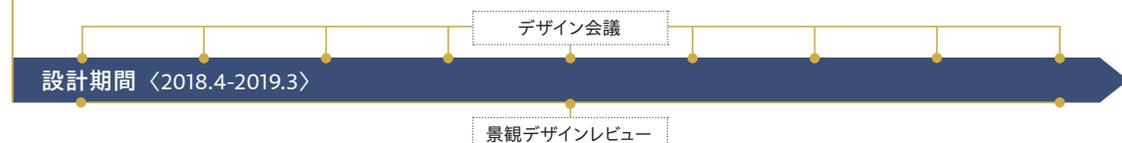
南方熊楠記念館新館

プロポーザル公募時点ではデザインレビューの実施は決まっていなかったが、プロポーザル二次審査時に審査員及び関係者に実施を打診し、設計者選定後に設計者の承諾を得て実施している。



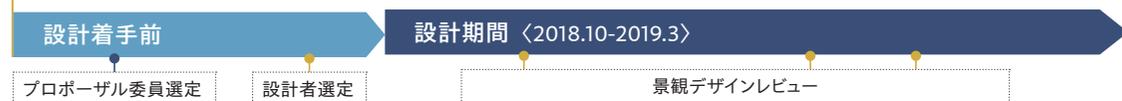
長門湯本温泉 恩湯

特定の建物を対象にした景観デザインレビューが3回開催され、まち全体の事業や計画について話し合うデザイン会議が月に1度のペースで開催されており、個別プロジェクトとまち全体の両方の視点から議論を行っている。



大井町駅前公衆便所

プロポーザル審査員選定、設計者選定の段階から、デザインレビューを実施することを前提に準備が進められている。デザインレビューは、タイトなスケジュールながら設計期間を通して計3回行われている。



気仙沼内湾 ムカエル・ウマレル

2011年秋頃から地区全体の復興まちづくりの検討、基本構想の作成などを行っており、個別街区の設計者が決定した後は、非公式の場ではあるが関係者が集まり継続的なデザイン調整を行っている。



横浜市役所

設計者選定後に行われた新庁舎計画デザインレビューを皮切りに、市民参加型の意見聴取の機会や自治体の設置する審議会での専門委員による議論など、設計期間を通して複数回用意されている。



COLUMN

レビュアーの立場から

1 浜甲子園団地

2 鶴岡第2地方合同庁舎

PART

2

浜甲子園団地における 長期にわたるデザイン調整の取り組み

浜甲子園団地は西宮市の海辺の阪神電鉄の鳴尾・武庫川女子大前駅と甲子園駅の南に位置した関西でも有数の大規模団地です。

当時の日本住宅公団(現UR都市機構)によって

1962年からわずか2年間で建設され、

都市部への急速な人口移動に伴う住宅不足解消に大きく貢献しました。

建設から35年後に行われた団地再生のデザイン調整の手法についてお伝えします。

建築家・関西大学名誉教授 江川直樹



リズム感のある建物高さの配置構成により、空との調和と風の通り道を確保。

浜甲子園団地

地区の概要

所在地：兵庫県西宮市枝川町、古川町

土地利用：賃貸集合住宅、分譲集合住宅、戸建住宅、グラウンド、商業、公園等

地区面積：約31ha

その他：浜甲子園団地地区計画(H15.6.27決定、R2.12.24変更)



主として5階建ての住棟が連続する従前の団地配置。

デザイン調整を実施することになった背景

兵庫県西宮市の浜甲子園団地が完成してから、約35年後の1997年に、団地の建替え構想、団地再生グランドプランの策定、そして1999年にグランドデザイン策定が開始することとなり、私どもの事務所が選ばれました。グランドデザインでは、「団地からまちへ」といったスローガンを掲げ、団地から浜の手の住宅市街地への再編というデザインの目標と、30年以上続く再生に際してデザイン協議会の設置を提案しました。

このデザイン協議会が景観デザインレビューのような場となり、その後、建替え1期での基本設計のプロポーザルで、私たちは応答・協議・確認重視の協議参加型・マスターアーキテクト方式、すなわちマスターアーキテクト自身もブロックアーキテクトの1人となって協議しながら全体の計画をつくっていく方式を提案し、共同の設計作業が開始されました。

初期のデザイン協議会では、私自身がマスターアーキテクトとして出席し、説明、意見交換、協議に臨みました。今もこの地域に様々な種類の施設の計画や建設が継続していますが、私はグランドデザインとUR賃貸住宅の建替え1期を担当したこともあり、現在はデザイン協議会の座長として参加しています。



模型を取り囲んでみんなで意見を出し合いデザインの方向性を決める。

団地建替えの開始時には、住民や市民とのワークショップもUR都市機構主催で開催し、その意向も聞きながら、この場所にふさわしい環境形成の検討に取り組みました。事業者側だけではなく、景観指導側となる市の担当者との意見交換もこの場で行われ、設計者や事業者、行政、発注者がフラットな立場で議論する良い仕組みとなりました。これはまさに景観デザインレビュー的な取り組みです。この浜甲子園団地の事例では議論による個別のデザイン変更の話ではなく、デザイン調整をどのように進めたか、その手法について紹介します。

「団地」から「街区」へ

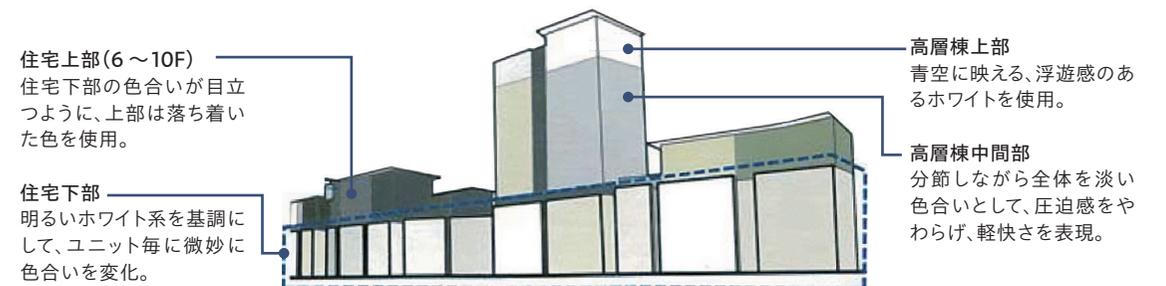
地域全体の再編では、周辺環境も対象地域に含まれます。協議では元々あった団地の道などが整理された環境構造シートをもとに、参加者で共有し、応答・協議・確認しながら進めていきました。具体的な形というよりは、取り組む姿勢やデザインの方向性、考え方の共有が重要で、ここでは「団地」ではなく「街区」にしようということ提案しました。

このとき議論したテーマとしては、堤防沿いの歩行者専用道路から、海につながる鳴尾川でヨットが見える景観の提案や、日常的に楽しめる芝生や植栽のある中庭を持った街区では、一階の住戸は、道路からも中庭からも直接出入りできるようにすることなど、掲げたテーマを通して設計を進めました。都市景観や、まちなみ景観を作るということ、すなわち建築とまちは積極的に呼応するという視点を共有しながらデザイン調整を展開しました。

メッセージの共有化によるデザイン調整

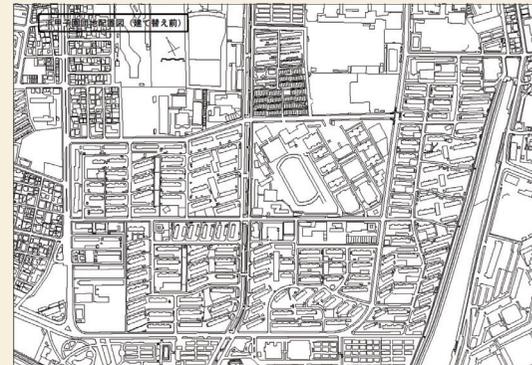
風をテーマにした環境形成については、ピロティを取りなさいとか、隙間を取りなさいというデザインガイ

〈浜甲子園さくら街色彩計画〉 色彩計画において4.5層のスケールの統一感と分節化した部分の多様性をコントロール。浜の手らしさを感じられる明るく軽快な色調としました。



建替え前の浜甲子園団地地区と現在の土地利用計画 (2021年2月時点)

建物の容積率の異なる民間分譲住宅とUR賃貸住宅の敷地の配分と混在を適切に計画することで、全体としてゆとりある住宅市街地の形成につながるとともに、本地区の特性になっています。



4 から 5 階の賃貸住宅棟に対し、若干の変化を入れつつ、平行配置を基本とした空間構成となっていた。

土地利用計画整備主体の敷地配分と工期を入り混ぜながら建替えが進行中。



※景観デザインレビューのスヌメ 4 より抜粋



中低層住棟のデザインと搭状の住棟の配置により、空との親しさ(親空性)を創出。



通り沿いに中低層住棟を配し、奥に細い高層住棟を分散配置することでまちなみの形成と圧迫感を低減。

ドラインとは異なり、例えば「風を大切にしましょう」というようなメッセージで伝えています。

ひとけを感じられるような道路空間は、どのような建築を作れば実現できるかということは、ここでは「親街路性」と掲げ、みんなで考えるメッセージをもとに議論しました。

空が感じられる生活を、いかにつくるかをここでは「親空性」として議論しましたが、浜甲子園の気持ちの良い青空を意識しながら親しむために、この地域のランドマーク的な存在の六甲山も意識するという意味を伝えて、美しい屋根が連続する景観をつくることを目標に共有することにしました。

美しい空との応答のための高さ制限の変更

本地区には20mの高さ制限がありましたが、「美しい空との応答」を一つのテーマに掲げて変更することになりました。バス通りの沿道は、従来の中層住棟の高さを継続し、その奥側では高層住棟の実現が可能な高さ制限としています。この場所の青く気持ちの良い空との応答が、この場所に暮らす方々や周辺からの景観にとって大切な要素でした。

高層棟の住居からの視線や視界の抜けについては、模型を見ながらスリムな高層階を混ぜる配置を考えました。これは容積率を稼ぐための高さ制限の変更ではありません。実際にUR賃貸住宅の建替えでは容積率は低く抑えられています。建物の色彩のセレクトについても非常に細かな検討と協議を実施しました。これらは設計者にアイデアを出してもらった後に、皆で議論しています。

文章によるデザインテーマの共有

これらはマスターアーキテクトによる提案を抛り所に、みんなで議論を重ねていく手法で、私は基本的にすべてを文章で説明しました。それを皆で共有して進めましたが、この文章のデザインガイドラインは考えていく中で変わっていきますし、細かな場所の特性や、全体を楽しいまいちにしていくためにはアドリブやフェイントのような変更も混ざっているため、図面では描きにくいと感じています。

UR都市機構が整備して西宮市に移管される公園やブルバールなどやUR都市機構自身が建設する賃貸住宅も、このデザイン協議会で議論されています。議論や調整の場がつけられて20年ぐらいいていることが素晴らしいと思いますし、主催者のUR都市機構には敬意を表するところです。

江川 直樹 | Naoki Egawa

1951年三重県生まれ / 早稲田大学大学院修士課程修了 / 1977～82年現代計画研究所(東京)、1982年同大阪事務所開設、2004～21年関西大学建築学科教授 / 2018年関西大学名誉教授
日本都市計画学会賞(計画・設計賞) / 都市住宅学会賞、日本建築士会連合会賞(作品賞)他多数
2018年度文部科学大臣表彰(科学技術賞)



住棟のエンタランスを個性的にすることで、居住者に生活の楽しさを演出。



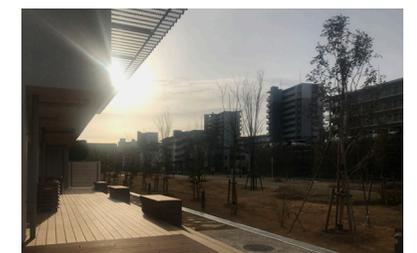
建物の間からは空が抜けて見えるように、広々とした魅力的な空間を確保。



1階住戸は道路からのアクセスを可能とし、生活のにじみ出しが感じられるよう工夫。



一般市民も利用できる、みどり豊かで快適な通り抜け空間を確保。



リズミカルな建物のシルエットが空に溶け込む、美しい夕景の浜甲子園団地。

鶴岡市のシビックコア地区における 景観デザインレビューの実践

鶴岡市は山々に囲まれた古くからの町割りが残る城下町です。
この城下町鶴岡の中心となるシビックコア地区における
「人」と「歴史」と「文化」をつなぐ施設となる
鶴岡第2地方合同庁舎における景観デザインレビューの取組みを紹介します。

建築家 高谷時彦



シビックコア内の
鶴岡第2地方合同庁舎の全景。

鶴岡第2地方合同庁舎

建物の概要

所在地：山形県鶴岡市馬場町2-12
 入居官署：鶴岡税務署、山形地方検察庁鶴岡支部・
 鶴岡区検察庁、鶴岡公共職業安定所、
 鶴岡市(防災倉庫)
 階数・構造：鉄筋コンクリート造 地上3階建て
 敷地面積：約3,915㎡
 延床面積：約3,490㎡
 工期：2020年10月～2022年7月



背景に金峯山、母狩山、月山などの山々が連なり、
全体として低層のまちなみが広がっている鶴岡市の景観。

地域性がデザイン調整においては重要に

山形県鶴岡市には高い建物がほとんどなく、全体に低層のまちなみが広がり、町の軸が遠くにある金峯山、母狩山、月山といった山々に対して向いているといった、景観的な特徴が明確に現れている町です。また、空襲を受けなかったことで、戦前からの町割りの構造が今でも残されています。この町で「シビックコア地区」と呼ばれている、「お堀」、「お城」、「近代の建築物」といった様々な時代を感じることで市民にとって重要な場所で行われた景観デザインレビューの取組みを紹介します。

デザイン調整を実施することになった背景

2004年、建物の高さを制限する高度地区が都市計画決定され、鶴岡公園周辺の歴史文化ゾーンでは城下町らしい景観を守るために15mという厳しい高さ制限が設けられました。当初より公益性のある建物は特例許可により高さ制限を適用しないとすることができましたが、特例の対象となる建物の用途、守るべき景観配慮事項や許可手続きについて明確化するため、2016年に都市計画が変更されました。構想段階で事前に景観デザインレビューを実施し、基準への適合を確認することの条件がよりわかりやすく整いました。

高度地区特例許可では構想初期段階における事前相談を勤めており、設計者が未定の場合や、具体的な敷地や用途が確定していないケースでも相談ができるなどの柔軟な対応を行っています。高度地区特例許可の明確化以前は、協議や各種調整を実施するタイミングや時期が遅かったことで、実効性が弱くなってしまったことからの反省で、このような制度になっています。



景観デザインレビューの様子。設計者による設計主旨の説明を参加者全員で共有。

専門家(レビュアー)の立場、位置づけ

私は、15年ほど前から山形県内の大学で、まちづくりの研究をしていましたが、第三者的立場からアドバイスする専門家「鶴岡市コミュニティーアーキテクト」として、高度地区特例許可の事前相談に関わりました。この事前相談が正に「景観デザインレビュー」のスタイルです。鶴岡市コミュニティーアーキテクトには建築やランドスケープの専門家が登録されており、案件ごとに利害関係がない3名程度を選出しますが、この「コミュニティーアーキテクト」と呼ばれる専門家が、景観デザインレビューにおける「レビュアー」に該当します。

3回行われたデザイン調整の現場

事例で紹介する鶴岡第2地方合同庁舎は、職業安定所、税務署、検察庁、防災倉庫が一つの建物に入居する複合施設で、この建物も含めた公共施設の整備を、まちづくりと一緒に「シビックコア地区」での取り組みとなる建物です。

景観デザインレビューは全て基本設計の期間内に計3回実施しました。当初は各用途の機能を各階に分けて配置することが一番やりやすいということで4階になっていました。また、ここは降雪地でもあるため雪置き場を兼ねることもできるように、広い駐車場(敷地内の空地)を確保する必要があるなど、この地域ならではの要求もありました。

第一回目のデザインレビューでは、機能を各階に振り分けた4階建ての提案があり、難しいことは十分承知の上で、平面的に3階にして高さ制限15m以下にできないかと強くお願いしました。また、まちなみを配慮した建て方にできないかということで、この敷地にかつてあった病院は、アールのついたコーナーを持つ特徴的なデザインの建物だったことを受けて、コーナーのデザインを意識して欲しい、前面道路に対して単に壁面を後退させただけの公開空地ではなく、周囲との景観や建物との関係性や、歩行者の利用といったことをも考えて欲しいとお願いしました。さらに重要なこととして、向かいにある国の重要文化財との関わりを考えてほしいという要望が、地域代表者から出ました。

第二回目は2、3か月後に開かれました。設計者が模型やパースを準備してくれたことで周囲との関係性がよく分かり、前回とは雰囲気が変わりました。模型を見たときに私も嬉しく思ったのは、高さを3階に抑えてくれたことです。道路に対してまちなみをつくらうという意識がよく表れている案で、道路を隔てた重要文

古い町割りが残る鶴岡は、
城下町の景観を大切にしたい意識が高いまち

シビックコア地区で景観を大切にしたいという市や住民の想いや、早稲田大学佐藤滋研究室が長年鶴岡市と関わってきた実績により、景観やまちづくりに対する意識の高い土壌が育まれています。



低層を中心とした落ち着いた鶴岡市のまちなみ。

鶴岡文化学術交流シビックコア地区と建設地の位置。



一計画地
高度地区種別：第1種高度地区
用途地域種別：商業地域

この地図は、国土地理院地図長の承認を得て、同院発行の電子地形図(タイル)を複製したものである。【承認番号 平29東複第33号】

鶴岡市の地区指定と専門家制度とは？

鶴岡市は、「シビックコア地区」や建築等の専門家の登用する「コミュニティーアキテクト」制度があります。景観デザインレビューではこのような取り組みがベースとなって実施につながっています。

▷シビックコア地区

鶴岡文化学術交流シビックコア地区(2002年度設定)は、「城下町鶴岡の中心」を維持し、人をつくり、人がたくさんいるシビックコアをテーマに、官公庁施設と民間建築物等が連携し、地域の利便性向上を図り、魅力とにぎわいのある都市拠点形成を進める地区。

▷コミュニティーアキテクト

鶴岡市コミュニティーアキテクト制度(2017年度)は、第三者の立場から景観まちづくりについてアドバイスする役割を担う専門家組織。高度地区特例許可時の公益施設等一定の条件のもとで高さ制限を適用除外する際に、コミュニティーアキテクトによる事前相談を義務化。

化財の黒い板塀の建物に対して、自転車置場に板塀を立てるといった対応も考えてくれました。検察庁なので外に対して閉じる部分が多くなるけれど、ロビーでは周りの山が見えるように開放的につくりたいという希望も取り入れてもらいました。今回は模型を中心にフランクに話しなが進むことができ、設計者の方も設計の論理や、できるできないということを非常にはっきりと話されて、良い雰囲気です。実施できました。若干の追加依頼はあったのですが、高さを15mに抑えてくれたことは非常に評価してよいのではないのでしょうか。

第三回目の最後のレビューは実際に図面を描いている若手担当者が説明してくれて、模型を見ながら皆で議論していくことで、概ねできる範囲のことはやっていただきました。行政の方も加わり、最後までみんなで話し合うという雰囲気で議論ができ、私はこれを成功事例として報告をしたいと強く思います。

行政担当者の意識も非常に高く、創造的な協議という雰囲気、日本でのデザインレビューの取組みの参考とした「英国CABE」がやっていたことを踏襲できたと思っています。大きく壁に貼り出された図面や模型を前にして具体的なイメージを共有できたことも有意義でしたが、やはり重要なのは発注者、設計者ともに、景観に対する意識が高いということであったと思います。

デザイン調整の意義と、これからの期待

デザインレビューは設計者に大きなメリットがあり、私自身もかつてレビューをされる側で助けられたことがあります。役所の発注担当者から予算を厳しく言われていたのですが、レビューから設計者提案の実現に頑張ってくださいと言われ、劇的に案を変更できた経験もありました。設計者側が主体的に指摘事項に対して変更案を考える姿勢さえあればデザインレビューは大きなメリットがあることを設計者にお伝えしたいと思います。成熟の時代にふさわしい奥行きや深みをもつ風景づくりに、デザインレビューが寄与することをもっと知って欲しいと願っているところです。

鶴岡市では今回の事例だけでなく高度地区特例許可に対応してデザインレビューが実施されていますが、市民にとって大事な場所では高度地区特例許可が伴う時だけでなく、その都度、実施される方がよいと思います。鶴岡市に限らず、広く確認申請とか法律の中に景観や、まちなみの美しさのある地区でデザインレビューが組み込まれると発注者、設計者そして市民やこの町を訪れる人々すべてに良い方向に向かうのではないかと感じております。

高谷時彦 | Tokihiko Takatani

1952年香川県生まれ / 1976年東京大学工学部都市工学科卒業 / 1976～89年横総合計画事務所勤務 / 1989年～設計・計画 高谷時彦事務所設立 / 2005～2020年東北公益文科大学・大学院特任教授
公共建築賞優秀賞 / 日本建築学会作品選奨 / BELCA賞(ペストリフォーム部門)東北建築賞作品賞 他 / 共著に「見えがくれる都市」他



道路を挟んで国指定重要文化財があり、これに対する配慮も景観デザインレビューで議論。



重要文化財への配慮を基調に、通り側のデザインを検討。



自転車置き場も重要文化財の板塀のデザインに付き合うことによる配慮。



寒さの厳しい外部と内部室内との緩衝空間となる「土縁」の確保。



市民が気軽に立ち寄ることができるエントランスロビー。

「建築等を通じた良好な 景観形成・まちづくり推進協議会」

(景観まちづくり協議会)

「建築等を通じた良好な景観形成・まちづくり推進協議会」は、建築関連の5つの団体（(公社)日本建築士会連合会、(公社)日本建築家協会、(一社)日本建築学会、(一社)日本建築士事務所協会連合会、(一社)日本建設業連合会）を中心に、2009年に設立されました。近年は、本書のテーマとなる“景観デザインレビュー”に関する普及啓発等に取り組んでいます。

本誌(まちを変える景観デザインレビュー)のほかに、主に自治体職員の方に向けた景観デザインレビューのガイドブック「景観デザインレビューのススメ」4部作も作成してきました。実際に景観デザインレビューに取り組む際のポイントやノウハウ等を知りたい方はぜひご一読ください。



「景観デザインレビューのススメ」は協議会HPにて無料公開しています。
<http://www.kenchikushikai.or.jp/torikumi/machitsukuri-kyogikai/>



「まちを変える景観デザインレビュー」 令和5年3月発行

発行 建築等を通じた良好な景観形成・まちづくり推進協議会(事務局 公益社団法人 日本建築士会連合会)

企画・編集 株式会社 都市環境研究所
 (企画・撮影・編集協力 石川望)
 (デザイン 清水麻美子/株式会社 マミコ社)

協力 国土交通省 住宅局 市街地建築課

※掲載の写真及び記事の無断転載・複製を禁じます。

Changing the City through

LANDSCAPE DESIGNREVIEW

発行：建築等を通じた良好な景観形成・まちづくり推進協議会

企画・編集：株式会社 都市環境研究所